

もっと! 孕ませ! 炎のおっぱい異世界エロ魔法学園!

アートワークス

Let's get all the girls in the class pregnant.

コアマガジン





もっと! 孕ませ! 炎のおっぱい異世界エロ魔法学園!

アートワークス
Art work s



Contents

- P005 版權イラストギャラリー
- P018 天使 英玲奈
- P026 オルガ
- P034 フィー = キステルミット
- P042 リディア = ルイトガルト
- P050 カジュニア = ブラッド = クラウゼル
- P058 ナオミン = イヴァ = ルシル
- P066 カトレーヌ = エ = ロマンシア
- P074 ミャウ = オルフエル
- P080 兎月姫 かぐや
- P086 雪乃小路 みぞれ
- P094 ハーレム&その他イベント
- P098 サブキャラクター (マリィ/セリカ/ルミア/ミルファ/システィアーネ/エレン先生/サラ/ジルダ/アサミ/ティアナ)
- P112 背景コレクション
- P114 ラフ画ラフコレクション
- P126 インタビュー
- P130 奥付





あつと!
孕ませ! 炎の
おっばい
異世界エロ魔法学園!

-もつと!孕ませ!炎のおっばい異世界エロ魔法学園!-

Illustration Gallery







▲コミックバベル2018年7月号表紙イラスト





▲販促B2タベストーリー (げっちゅ屋)

▶販促B2タベストーリー (DMM)





▲販促B2タペストリー(メロンボックス)



▲販促B2タペストリー (とらのあな)



▲バレンタインポストカード



▶ホワイトデーポストカード



▲販促B2タペストリー(トレーダー)





魔女の血を引くツンデレOcup幼なじみ

天使 英玲奈

Erena Amatsuka

[CV:唯香]

身長:162cm

スリーサイズ: B119 / W56 / H88

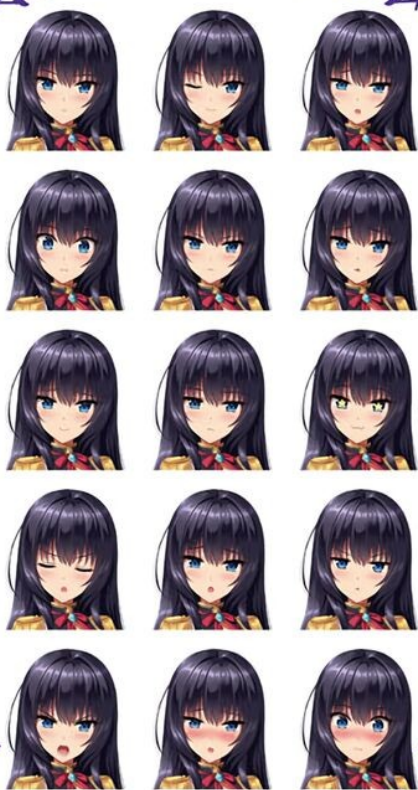
以前は匠炎厨矢と同じ世界で暮らしていたが、母親の転勤で異世界に引越したユリドラシル魔法女学園の2年生。成績優秀で美貌もあり、常に冷静な佇まいから女子生徒たちのカリスマ的存在なのだが、魔女のトレードマークである“ホウキにまたがって飛行すること”を苦手としている。たまに毒舌的であったりオヤジギャグを呟く。

「別にいいのよ。おっぱいの大きな可愛いゴーストに合えるように、向こうに送ってあげても」



Erena Amatsuka

FACE COLLECTION



制服



クエスト



裸



「あひいっ！ あっ……いやっ、ダメえっ
……た、ただでさえ、私っ……敏感だ
から……跨れないの……！」

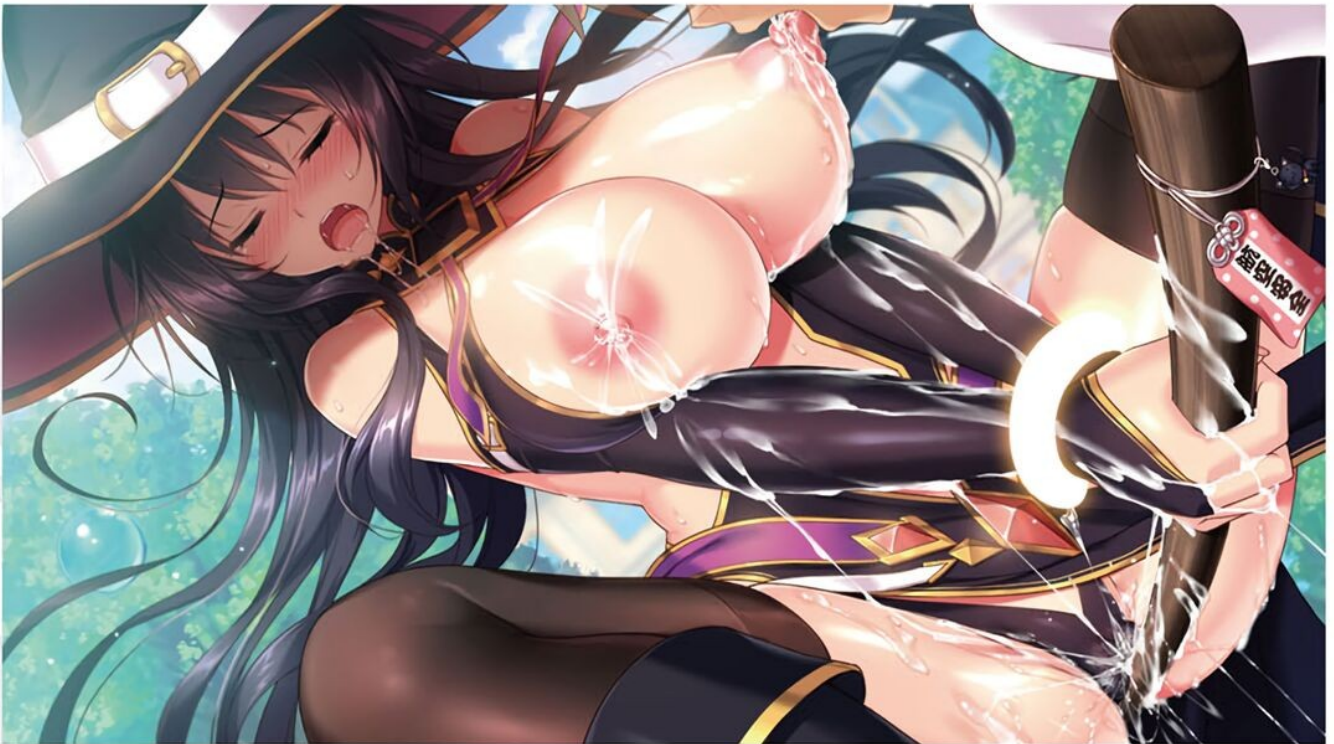
英玲奈「んっ！ んっ！ イッ、イクっ、イクうっ!!」
俺の口の中に母乳を大量にほとばしらせながら、英玲奈は絶頂に達してしまった。おっぱいミルクのほうも凄まじいが、愛液もプシャッと飛沫をあげ、ホウキの柄をトロトロに濡らしている。

炎厨矢「あーあ、ホウキがグチョグチョだ。やらしいマンコ汁が滴り落ちてぞ」

英玲奈「はあっ……はあっ……い、言わないで……くれるかしら……これ以上、恥をかかせないでえ……うう……」

炎厨矢「ところで、さっきよりホウキが落下してきてぞ？ 魔女なんだから、もっと高く飛ばないとダメなんじゃないか？」

実際、浮き上がっているのは俺の術のせいなので、英玲奈はどうしようもないのだが。魔女が他人の手で浮いているなんてことは、おそらく本人は認めたくないだろうから、こういう脅しは効くはずだ。俺はホウキに乗っている英玲奈の下に潜り込んだ。





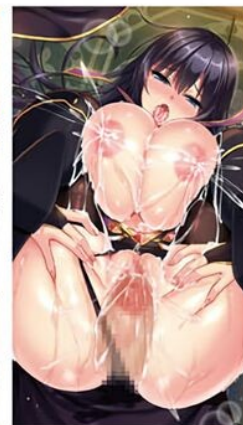
英玲奈「ふひゃあああ……あ、熱いっ……！　すごいドロドロ……
 ああ……ン……肌がやけどしちゃいそう……ああん……」
 どこか嬉しそうに表情を輝かせて、英玲奈は俺の放出した精液を浴び、なおかつ口で追いかけて飲もうとしている。恥ずかしいような嬉しいような気持ちが込み上げてきて、俺は柄にもなく照れてしまった。英玲奈は頬を紅潮させて、肌にベっとりとおっついた精液を眺め、うっとり溜め息を漏らした。
 英玲奈「はあはあ……ふう……もう……ほんとに好き勝手ぶっかけてくれるわね……」

「はあ!?　ば、ば、ば、馬鹿じゃないのっ?　嬉しいわけじゃない。こんなに臭いの引っ掛けられて、迷惑もいいところだわ」



「くはああっ……ああっ……そ、そんなっ……
 ンンっ……激しくしないでえっ……
 ふああっ!　お、女の子の、大事な……
 ところなんだからあ……ンンンっ!」

英玲奈「うああっ……はあん!　し、舌が、熱くて……ふううん……と、溶かされちゃいそうっ……んああ……ああっ……んう……あはあ……ンン……」
 炎厨矢「うん、確かに……コリコリしてきてて、舐め終わり寸前のキャンディーみたいな食感になってるような……ずちゆるぶちゆるじゆる……」
 英玲奈「やあん!　は、恥ずかしいこと……んうっ、い、言わないでえ……あはあっ!　ンンっ……そ、そんなっ、あう……舌で突っつかないでよお……」





英玲奈「んんっ……はあ、はあ……も、もう……どうしてくれるのよ……？」

中出ししたことを言っているのだろうか？ どうしてくれると言われても困ってしまうのだが……。

英玲奈「はあ……ストッキング汚れちゃったわ……」

炎厨矢「そこかよっ！」

俺の反応を見て、英玲奈はすっきりしたような顔をしてクスッと笑った。

英玲奈「ふふっ……オナニーしている女の子のストッキングでムラムラしてしまった変態魔法使いくん？ 堪能できたかしら？」

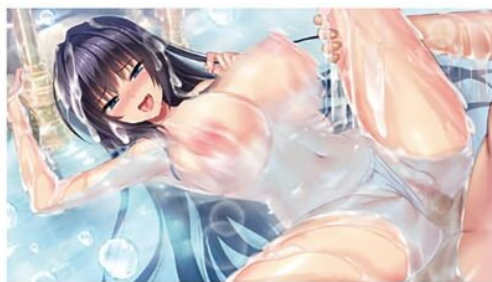
「ふわああっ……そ、そんなに……がつつかないでよ……！……いくら……奥が気持ちいいからって……んんっ……はふうっ……あっ……ああっ！」

「乱暴に吸われて……アナタに……
おっぱい犯されてるみたいで……
ミルクも止まなくなっちゃう……
ああんっ」

英玲奈「ああっ……ん、やだあ……私のおっぱい
の間で……どんどん大きくなって……変態チン
ポ……はあんっ」
オマエのOカップもあるエロすぎるおっぱいに言わ
れたくないんだがっ！ しかし、このローションの

スルスル感とこのおっぱいの弾力があつ……はあ
はあつ……腰の動きをとめられねえっ！

英玲奈「ああん……こんなの、もう……切なくて、
チンポしか考えられないわ……はあん……んんふう
っ」



「あああんっ、腰が勝手に動いちゃうのっ……
いやらしいこと身体に……いっぱい教えるから、
憶えちゃうのっ」

英玲奈「ああああつ……ああん、見ないで……いやああああつ
……はああんっ！」

まるで小水のように派手に潮を噴いてしまう英玲奈のマスコ。羞恥
に頬を真っ赤に染め、ローションプールの中で果てていた。

英玲奈「はあはあ……」

俺も英玲奈に覆い被さるように上半身を預け、身を任せていた。そ
してお互い見つめ合い唇を重ねた。

英玲奈「んふう……ん……ちゅう……んっ、んふうっ……んっ
っ」

ローションまみれでキラキラ光っている英玲奈が、幸せそうにいつま
でも見つめていた。



お尻を振っておねだりする魔美さんの割れ目に指を滑り込ませた。中は相変わらずヒクヒクと蠢いている。親子でも、オマンコの中の形は少し違っていた。手首を上手く使い、凸凹を確かめるように360度撫でまわす。自分にペニス埋め込まれているので、英玲奈は何も文句を言わない。現金なやつだ。魔美さんも英玲奈が感じているのを嬉しそうにじっと見つめている。

炎厨矢 (娘のことが大好きなんだろうな……いいお母さんだよな)

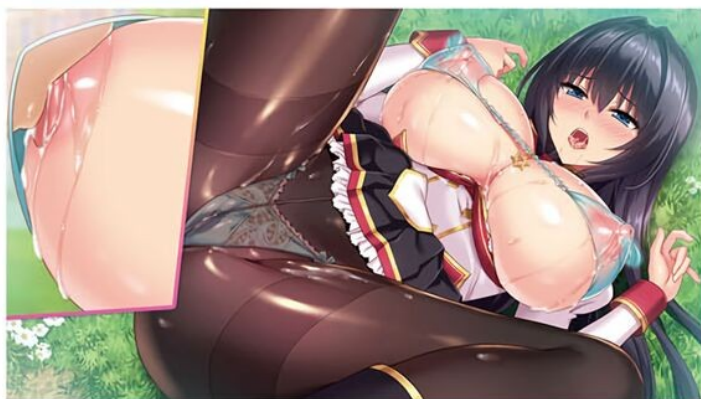
俺はえぐるようにペニスをねじ込んで、やや強めに突き始めた。英玲奈の恍惚とした表情が、俺をじっと見つめている。感じているらしく、瞳が潤んでいるのが可愛い。

英玲奈 「はふうっ！ んはあん……あうあっ……ああん……先っぽがすごく硬い……奥のほうまでズンズンされて……んっ……ああっ……こうされるの好きい……!!」

魔美 「ああっ……んっ……はあ、んんっ、ううん……すごくいいわ……Gスポット刺激されるの……とってもいい気持ち……んん……痺れちゃう……ああ……」

「むうう、ママばかりずるい！私だって、もう我慢できなくなってるのにい……匠君の馬鹿。意地悪。ろくでなし。最低。道端の石ころ。気の抜けた炭酸」





「うええん、も、もうやだあ……
わらひの身体、変になっぴゃった……
うっ、う………気持ちいいのが
止まらにゃいの………はあ………はあ………」

英玲奈「あはああああつ、イ、イッひやう！ あうあつ……イクらっ！ ……んんんんっ、うううあああつ！！」

頑張って耐えたようだが、押し寄せてくる快楽に勝つことはできず、英玲奈はおっぱいだけでイッてしまった。

炎厨矢（おおおっ………すげえ！ オマンコ触ってないのに……マジでおっぱいだけで……!?）

もはやパンティの中は洪水である。果てた瞬間に愛液がほとばしったのが、黒パンストの上からでもわかる。濡れすぎてパンティの布地が少し盛り上がっているぐらいだった。まるでオシッコでも漏らしたようにさえ見える。あまりのエロさに、俺はゴクッと生唾を飲み込んだ。

「私のも……飲んでもらわないと困るの……
いっぱい出ちゃってる……ああん、もっと！
ああうっ……もっと吸ってえ……
はあっ……んんっ！」

英玲奈「ああん、いっぱいあふれちゃってる……気持ち良くなると、勝手におっぱい出てきちゃうの……」

魔美「いいじゃないの、英玲奈……たっくんにテイ스팅してもらいませよ。ふふっ、どんなお味がするのかしら？」

炎厨矢「んぐむむ……待つへくらはい……もむもむ……んん……微妙に味が違いまふねえ」

英玲奈「ね、ねえ……ちょっと怖いけど……ちゃんと答えてもらえるかしら？ ママと私の……ミ、ミルク……どっちが美味しい？」

炎厨矢「ろっひも甘くてコクがあって美味ひいよ」



「はあぁんっ、う、嬉しいっ……わたしにスケベマンコいっぱいちょうらいっ……ふあぁっ、んっ、双子が孕んじゃうくらい、いっぱい中出ししてええっ！！」



キッチンに響き渡る英玲奈の絶頂と膣内射精は、ほぼ同時だった。英玲奈の膣奥にドクドクと精液が注がれていく。まるで体内のエネルギーがすべて搾り取られたような心地だった。英玲奈はいろんな汁を飛び散らせながら全身を激しく痙攣させて、気持ち良さそうに絶頂を食っていた。

英玲奈「はあ……はあ……んん……いやん……お潮ふいちゃってるう……んっ……はあう……見ないでえ……」

急に恥ずかしくなったのか、頬を染めてかぶりを振る英玲奈さん。新婚家庭のキッチンは二人の体液やら母乳やらでムワッと劣情をもよおすイヤらしい匂いに包まれていた……。





屈辱的なスキンシップ妄想で昂る
Pcupクルセイダー

オルガ

o | g | a [CV: 風花ましろ]

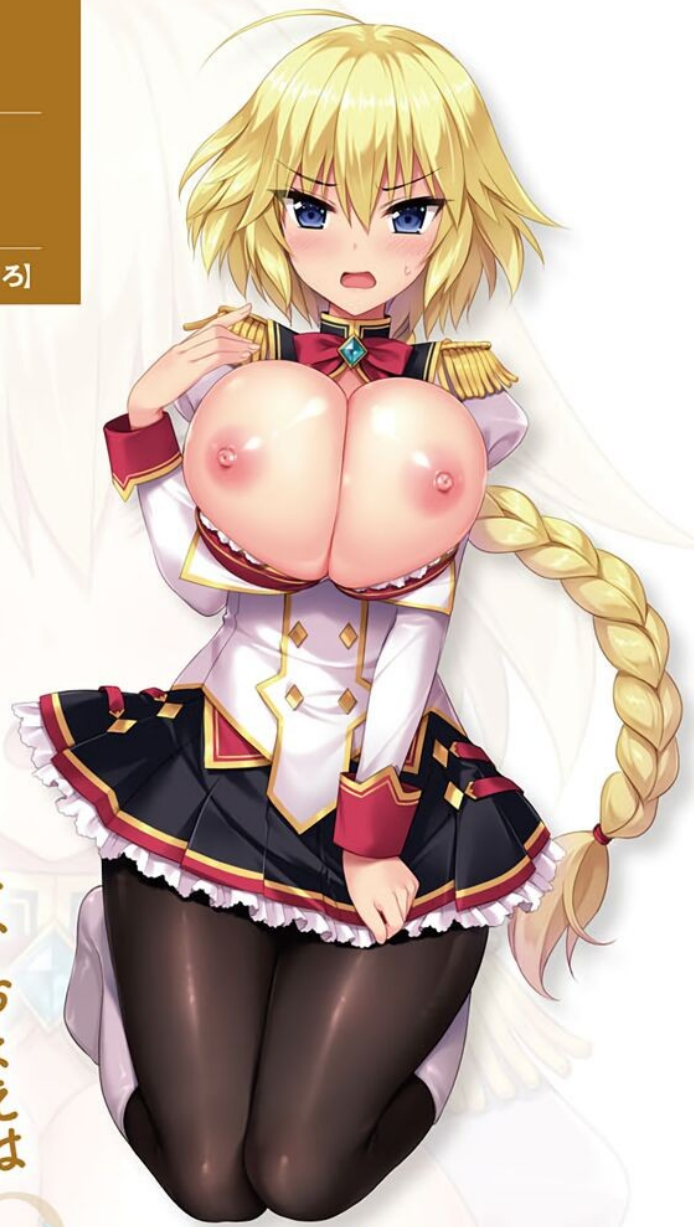
身長: 160cm

スリーサイズ: B116 / W55 / H85

FACE COLLECTION



「うわああ…シンんっ…お、おまえは
いったいどこから沸いたっ！」



Olga

剣術に秀でていて、そのサポートとなる魔法を習得するため学園に入学してきたユリドラシル魔法女学園の2年生。容姿や言葉遣いなどに気品はあるが、つつい下ネタに反応してしまう程度に性的好奇心が高い。よく不幸を背負い込むが、変態妄想癖を持っているため、意図的に墓穴を掘ったり貧乏くじを引いている疑惑がある。



制服

クエスト

裸

「ちよ、そ、そんなところを擦るな……ああつ、んんっ！
 ああ、だ、ダメ……あうんんっ、あああんっ！」



オルガ「こ、この……こんなことをしてただで済むと思うな……ああんっ！」

何とか舌から逃れようと抵抗するオルガだが、カメレオンの長い舌が全身に絡みついているせいでそれも叶わない。攻撃の手を緩めないカメレオンはオルガの身体を締め付けるように圧力をかけていく。豊満な乳房やその谷間、そして妖艶のラインを誇るマンコを舌が滑り食い込む。

オルガ「ああつ、うああ……んんっ、あつ、ああん、んくっ……！」

が潜伏スキルを使用しているせいなのか、このカメレオンが雄の本能を発揮しているかはわからないが、そんなことはどうでもいい。今はこの素晴らしい光景を目に焼き付けておかねばっ！



こんなに間近で見られて興奮を抑えられないのか、断続的に潮を噴上げる。その度にピクンを身体を跳ね上げ、俺の顔に愛液を容赦なくぶっかけていた。

炎厨矢 (男勝りなオルガが潮を噴いてイってるとか、興奮して仕方ないんだがっ)

口の周りに付いたそれらを舐めとりながら、恥ずかしさでおかしくなりそうになっている彼女の表情を堪能する。ズボンのなかでパンパンに膨れ上がった俺の分身が、一刻も早く刺激が欲しいと疼いていた。一刻も早く刺激を待ち望んでいるペニスをズボンからさらけ出した。

オルガ 「お、おい……そ、そんなにペニス大きくして、次におまえはこの私にいったいどんな辱めを与えるつもりだ……はあはあ」

いったばかりだというのに、期待感たっぷりの眼差しでペニスを見つめるオルガ。

「ああ、見られてる……お漏らしだけじゃなく、イってるところまで……こんなに間近で、ああっ、なのに、イクの止まらない、恥ずかしいのに止まらないのお」





オルガ「はぁぁぁぁあッ!! お、おしりのなかであちゅくて濃いのがあばりえてえ……あぁっ、おしり、おかしくなっひゃううっ!!」

本日三度目とは思えないほど大量の精液を、アナル開通記念にぶちまける。残った精子を全て注ぎ込んだような濃厚な白濁が、一瞬にしてアナルを埋め尽くす。しかし射精したことで圧迫感を増したアナルの快感で、全然収まる気がしない。

オルガ「あぁ……まだ、せーえき出てくりゆう……も、もうおしりのなか、はいりやないのに……」
嬉しそうに精液を受け入れるオルガの膣からは、未だに小水が溢れて出していた。

「はぁあんうっ! ち、違うっ! お尻をはたかれて感じるなんて……そ、そんなこと……あぁンっ!」





「こ、こんなにやらしい剣の扱いを褒められても、嬉しくなんて……お、おいっ、あまりビクつかせるな……」

喉を鳴らしながらまるで紅茶を楽しむように、次々に注ぎ込まれる精液を喜んで飲み込んでいくオルガ。チンポから残りの精液を吸い出すために、強く口をすぼめてくる。

炎厨矢「うう……搾り取られるっ……」
その刺激に耐えかねて、腰を引こうとするが、オルガの口がそれを許してくれない。

オルガ「ぢゅるう……んんっ、んっ、ぢゅるるっ！んっ、んちゅっ……んむんんっ！」
一滴残らず、吐き出されたすべての精液を飲み込んでしまったオルガ。

オルガ「はあはあ……まだ少し、喉に絡みついて……んんっ……んんっ、ごくんっ」

炎厨矢「そんなに俺の精液が気に入ったのか？」

頬を紅潮させながらも、甘い息を漏らしながら小さく頷くオルガ。そして、もじもじと悩まし気に太股を擦り合わせる。

「はああああんうっ!! 濃厚ミルク、子宮にびゅうびゅう出てるの!」



オルガとの新婚プレイが想像以上に気持ちよすぎて、なかなか射精が収まらない。そんなベニスから、精液を一滴残らず搾り取ろうと蠢動するオルガの膣道。その刺激もあって、幾度となく吐き出される精液がオルガのなかを満タンにしている。

オルガ「たきゆみのせーしで、おまんこ満たされて……こ、こんなに出来たら、赤ちゃん、できちゃう……」

そう言いながらも、もうほとんど精液が残っていないベニスを締めつけ続けるオルガの膣。

炎厨矢「マンコ、嬉しそうに疼いてるぜ？ 本当にエッチな新妻だな」

それにエッチなのはマンコだけではなく、未だに母乳をたらし続けるおっぱいのおかげで、調理台はミルクまみれになってしまっていた。

オルガ「はあはあ……な、なあ、もう一回……キスしてもらっても、いいか……あ、あなた……」





「神聖な姫騎士のこんな姿……アイツに見られてると思ったら、疼いちやう……あっ、あんっ！」
 「赤ちゃんが生まれてくる穴」
 んあああああっ!!」

オルガ「ア、アソコ……すごい熱い、こ、こんなに気持ちいいのは初めてだ……ああっ！ も、もしかしてアイツに見られることを想像したから……んっ、はああんっ！」
 自分のDM属性に気付いたような言葉の後、それを振り払うように首を振るオルガ。
オルガ「ち、違う……これは、次こそタクミに弄ばれないようにするための訓練だ……決して気持ちよくなるため

は……ああ、んっ！」
 しかし、局部を擦れる熱い快感に流され、性感帯を自ら弄りまくる。
炎厨矢「訓練なら、ブーツキャンプ並に厳しくないダメだぜっ」
 俺は腰をさらに激しく動かし、水晶越しにマンコを何度も刺激する。



「ああああっ、ちんぼとしきゅーがああ……
んっ、ああっ……ぶちゅかって……
ああああっ、びりびりってくりゅうー！」



オルガ「はあああああんっ！ あちゅいのきてりゅ……しきゅうのなかあ、あふれてくりゅううっ！」

炎厨矢「オマンコ締まるっ！」

同時に絶頂するオルガと俺。俺は溜めに溜めた白濁を子宮へぶちまけ、オルガはそれをさらに求めるようにチンポを絞る。

オルガ「ああああん、んっ……くう、あああっ！ あっ、

あっ、はあああん！」

何度も脈打つようにしてどくどくと精液を吐き出していく。大量に膣道を駆け上がる精液の感触に激しくイキまくるオルガ。

炎厨矢「ま、まだ止まらないっ……うおっっ！」

子宮で受け止めきれなかった精液が太股を伝って、石の床に滴っている。





炎厨矢「ほら、窓に押しつけられてる、お前のスケベなドMおっぱい……あそこのオヤジがガン見してるみたいだな」

オルガ「そ、そ、そんなこと……あるわけないだろうっ……ううっ、はぁんっ」

炎厨矢「というわりにこのドMおっぱいクルセイダーのマンコは、チンポを締付けてくるんだがっ」

オルガ「あぁっ、うぁぁ……んんっ、あっ、あぁん、んくっ……!」

炎厨矢「馬車の中で後ろから犯されてるドMクルセイダーだし、しかも、母乳まで出してエロくないわけないだろうっ」

オルガ「はっ、はっ……そんなに私を辱めたいのかお前はっ……あぁん……くっ……ころっ!」

クルセイダーのいい“くっころ”頂きました——っ!

オルガ「あぁぁっ……お母様の前で……遠慮無く……わ、私を……辱めるなっ」

「あぁぁっ……
相変わらず、乱暴に……
入れてくるな……
ぎゃふうっ、ンンッ!」





発情を抑制したいUcup戦闘用ホムンクルス

フィー = キステルミット

Fee Kissthermile

[CV:ハツ橋きなこ]

身長:160cm

スリーサイズ: B127 / W55 / H84

FACE COLLECTION



「ど、どうかしましたか……先輩？」
も、もしかして、
私の護衛に何か不備でも？」



制服



クエスト



クエスト(銃)



裸

魔導技術向上のためにユリドラシル魔法学園で学んでいる、真面目で恥ずかしがり屋の1年生。戦闘用スーツに変身するスキルを持つが、副作用として魔力を消費することで発情してしまう。しかも、肉体に密着するスーツのせいで変身しているときから息を荒げている状態。その対策として炎厨矢と特訓を重ねたりしているらしい。



「あひいっ！ あっ……いやっ、ダメえっ……た、ただでさえ、私っ……敏感だから……跨れないの……！」

炎厨矢「フィー、まだ出すぞっ」
フィーのことは見ている場合ではないくらい、爆発する欲望を止められず、射精が全然止められない。
フィー「ふあい、ンっ……もっと、くらはい……ンっ、こく、んくっ……」
何度脈打ち、まるで呼吸するように精液を放っていく。口内を満たされる精液の熱さと味を感じながら、満足そうな表情を浮かべるフィー。ようやく射精がおさまり、肩で息をする。
フィー「ンっ、ぢゆる、こく……ごくんっ……ぢゅっ、ぢゆるるるるっ!!」
射精が終わっても、ペニスから口、手を離さず甘えるような感じでしゃぶり、小さく喉を鳴らして精液を飲み続けるフィー。



「ハアハア……こ、こんなに大きくして……ほんとにしようがない先輩なんですから……！」

注ぎ込んだ欲望の白濁を、小さく喉を鳴らして飲みこむフィー。それに加えて、舌も激しく動かして口の中に垂れた精液を転がしてエロい表情を浮かべる。
炎厨矢「フィー、エロいぜ……」
上目遣いでこっちを見つめながら精液をゴクゴク美味しそうに飲むフィーに興奮が収まらない。口の中でピク



ピクと暴れるチンポを抑えつけるように、口をすぼめてくる。
炎厨矢「はあはあ……フィー、ちゃんと飲んで偉いなあ」
フィー「ンっ、ンっ……ぢゆる、ぢゅう……れろ、んふう……ぢゆる、ぢゆるるるうっ!!」
目をとろんとさせて、またお掃除フェラまでしてくれるフィー。いやらしく絡みついてくる舌と、蒸れたおっぱいマンコの圧力でまったく衰えず固いままのチンポ。
フィー「ンっ、はあはあ……先輩のが、まだ喉に絡みついで……ンっ、んふう……」
炎厨矢「フィー、すげー気持ちよかった……でもこれで終わりじゃないよな？」
フィーのとろけた表情と、下半身をすり合わせているのが見えて聞くまでもなかったと確信する。



「せ、先輩の指がっ……なかで動いて……ダ、ダメっ……
あああっ、ンンっ……うあああああっ！」



腰をがくがくと震わせ、吸ってもいないのに母乳がとろとろと垂れてきている。

炎厨矢「フィー、もうイキそうなのか？」

フィー「そ、それは……ああっ、ンう……あふうんっ！」

恥じらいながら必死に耐えるフィー。そんなやせ我慢すら可愛く見えてくる。

炎厨矢「我慢なくていいんだぞ、このままイっちゃえよ。ほら……かぶっ」

乳吸いとヴァギナへの愛撫でフィーのリビドーを限界まで導いていく。

フィー「ああああ、ンっ……ああっ、んく……うああ……ひゃあんっ！」

フィーの母乳を飲みながら、いまにもイキそうなエロいフィーを見ているせいか、俺も身体の内側が熱くなってくる。チンポもさっきからパンパンに膨らんで痛いくらいだ。

フィー「ああっ、あっ……せ、先輩、私っ……ンう、ああ、ンあああっ！」

炎厨矢「いいぞ……フィーのイキたいときに、好きなだけっ……ンっ、ちゅうううっ！」

一気に限界が近づき、身体を小刻みにビクつかせるフィー。チンポを擦っているフィーの手の動きも速くなっていくと、どうしようもなく切ない感情と快感が下腹の奥から込み上げてきた。

フィー「あああああっ！ せ、先輩、先輩っ！ も、もうイっちゃ……ひゃああああああんう！」





「そ、そうじゃなくて……ま、まだ入ったばかりで……
いま、動かれたら……あああっ、んやあああっ!!」



フィー「ひゃあんうっ! ああっ、ンンう……あっ、あっ……んあ
あああっ!!」

炎厨矢「うおお、すげえボリューム、それにめちゃくちゃ柔らかか
いっ!」

後ろからおっぱいを驚掴むように揉みしだくと、喘ぎ声を上げて
感じまくるフィー。手に吸い付くしっとりとした肌触り、ぷるん
とした瑞々しさもあって、もう手が幸せでいつまでも揉んでいた
くなる。

炎厨矢「フィーのおっぱいは、先っぽのほうもめちゃくちゃエロ
いなっ」

フィーぐらいのサイズの胸になると乳首と乳輪が既にAカップ、
Bカップあるのでは? と思えるほどのボリューム。ぷっくりと
膨らんだ乳輪ごと乳首を、指ですりつぶすように揉んでやる。

フィー「ひいんうっ! せ、先輩……乳首い、あああっ、そこ、
もっと乱暴にしても……大丈夫、です……ひゃあんうっ!」

炎厨矢「それなら遠慮なくっ!」

フィー「ンン、あああっ……あん、ああっ……ンっ、ああんう
っ!」

乳首が取れそうなくらい強く摘んで引っ張ってやると、背中を仰
け反らせながらマンコを小刻みに震わせるフィー。

炎厨矢「フィーは激しいのが好きなんだな、それならっ!」
おっぱいへの激しい愛撫に合わせて、挿挿も一段階激しくして
いく。





「ああっ、あんあんっ！ せ、せんばいイジワルですう……
あああっ、そ、そんなに突かれたら……
わたし、またイっひやいますう！ あああんっ！！」

困ったようにいいながらもいったばかりで敏感になっているせいか、さっきよりもオマンコの締めが強烈だ。
フィー「あっ、んく……はあ、ンっ……やああ、ンあああっ！」
中出した精液がかき混ぜられ、結合部から泡立ちながら逆流してくる。
フィー「ああああ、あんあんっ！ ああっ、ンっ……ンあああ、ひやああんっ！」
予想外の快感に困りながらもエロ可愛く乱れるフィーに容赦なく腰を打ちつける。
フィー「ンっ、ああっ……んく……あっ、はあああっ！」
彼女の乱れっぷりを見るのが楽しく、気持ちよくて腰使いがどんどん激しくなる。
フィー「あん、あんうっ！ せ、せんばあい……わ、わたしい……さっきいったばかりにやのに……また……ああっ、ンっ……あふうんっ！」
炎厨矢「ほんとにフィーの甘えんぼは俺のチンポが大好きなんだなっ」
フィー「あああああっ、オチンポ……わたしの、ああっ、しきゅーをガンガンちゆいてえ……あああっ、ンっ、あんあんっ！」
龟头が子宮口を押し上げ、フィーはもはや自分から腰を動かすことができないくらい感じてしまっている。膣肉が抽挿につられていやらしく蠢き、チンポを扱きまくってくる。



フィー「ああっ……先輩、わ、わたし……ああっ、こ、壊れちゃうっ！ シっ、あんあんっ……やああんっ！」

さらに突き立てるような角度でヴァギナにチンポを打ち込んでやる。

フィー「あああ！ あんあんっ……シっ、あっ、ああああっ……んああああっ！」

開脚した足を痙攣させて感じまくるフィー。それよりもさらに激しくビクつくオマンコがチンポをこれでもかと思わせ締め付けてくる。

炎厨矢「フィー、どうだ？ こんなところでもするエッチもいいもんだろ？」

体重をかけるようにして一気に、引くときは優しくと緩急をつけつつ打ち込む。

フィー「シんっ、ひゃあ……シんっ、あんう……やあ、はあああんっ！」

呻きとも歓喜ともとれる声を発して、チンポを受け入れるフィー。言葉だけでなく膣道のキツさからも彼女の快感が伝わってくる。

フィー「ああっ、あん……シう、ああっ……あふうん……あっ、シんっ……はああん」

恍惚とした表情でいまにもイってしまうほど喘ぐフィー。チンポが溶けてしまいそうなくらい熱くなった膣肉が、絡みつくようにチンポを締め付けてくる。

炎厨矢「フィーのオマンコ、最高だ！ もっと、もっとチンポで突きまくってやる！」

膣奥から溢れ出てきた愛液まみれの膣を俺の肉棒でめちやくちやくにかき混ぜる。ぐちゅぐちゅ……と淫靡な粘着音を響かせながら抽挿をさらに加速させていく。

「やああ……エッチな声……いっぱい出ちゃう……ああっ、でも……そ、そんなに声出したら……モンスターに気付かれちゃいます……あああんっ！」



(ああああ、先輩のオチンポ……おっぱいのなかで膨らんで……も、もう出るのかな……出してほしいな……おっぱい孕んじやうくらいっ……)



フィー「やああ……ああっ……あ、熱い……おっぱいのなか……いっぱい出てきて……ああああんっ！」

おっぱいマンコに大量の精液を中出しする。その瞬間、おっぱいの谷間の上下から白いマグマが溢れ出す。

フィー「はあ、はあ……先輩の白いの……じんわり広がって……おっぱい妊娠しちゃいます……やあああんっ！」

中出しに感じておっぱいをむぎゅむぎゅしてくるフィー。

炎厨矢「フィー、き、気持ちいいっ……」

窮屈な快樂がチンポから精液を搾り取ってきて、さらに精液が噴き出した。

フィー「はあああんっ！先輩のせーし……おっぱいのなかでたくさん弾けて……あたたかいですう！」

射精が終わるころには谷間には精液が溜まって、それを嬉しそうに眺めながら精子の匂いを嗅いで感じるフィー。

炎厨矢「そこまで喜んでもらえて、俺も嬉しいにやり……はあはあ」

想像以上にZカップおっぱいマンコが気持ちよすぎて出し過ぎてしまった。精液と一緒に体力も吸い取られてしまったのか、どっと疲れがおとずれてくる。

フィー「あれ？先輩、ちょっと疲れちゃいました？でもお、もっとしないと私は満足できませんよぉ！」



フィー「先輩と共闘セックスできるように
パワーアップしましたっ」

ルフィーナ「ああっ……なんでそんなとこ
ばかりパワーアップしちゃうのよっ」

炎厨矢「ルフィーナさんが作ったホムン
クルスだからでしょっ」

と思わずツッコミを入れてしまう俺。

ルフィーナ「えっ……匠クン、ま、まだ、
私のなかで大きくなっちゃうの？ ……
ああ、いやあッ」

炎厨矢「すみませんっ……節操のない息
子でっ」

フィー「あッ……先輩の精子で、私
に妹作ってくださいっ……ンッ」

ルフィーナ「あッ……そんなの無理よ
っ……絶対無理だからっ……あああッ
ッ」

といいつつ、ハマったままのチンポに腰
を揺すって激しく求めてくるルフィーナさ
ん。

ルフィーナ「ああっ……んんっ……マ
ンコもお尻も両方から強く挟られて……
らめえ……あはああっ」

炎厨矢「フィーもそう言っているんだし、
妹をビルドするためにルフィーナさんのラ
ブマンコにたっぷり中出しイキますよ
っ!」

ルフィーナ「ああ、ンッ……これ以上、
ナカはだめえっ……ああああっ」

「でも、おかあさんは、
おかあさんですからっ……んっ、んっ……
たくさん気持ち良くなってくださいっ♪」



奥手で人見知りのScupドMサキュバス

リディア = ルイトガルト

Lydia Luitgard [CV:なつめ美南海]

身長:165cm

スリーサイズ: B117 / W57 / H91

物 静かな性格で人と話すことが苦手なユリドラシル魔法女学園に通う淫魔の1年生。異性を虜に出来る魅惑的な肉体をしているが、エッチなことを恥ずかしいと感じていて、サキュバスとしての存在意義に悩んでいる。そんなおり、なぜか異世界から現れた“変態”の炎厨矢に“特訓”を受ければ一人前になれるかもしれないと思込む。



「先輩からキスで魔力を補充させて貰っています……先輩、ご迷惑ではないでしょうか、私は幸せです♪」



制服



クエスト



裸



「あっ……ほしい、です……せ、先輩のご褒美、とっても、ほしいです……」



リディア「んむんんーっ!! は、入ってきてる……せ、先輩のペニスが私のなかに……んっ、あああんう!!」

龟头を膣口にゆっくりと挿入していく。熱くスルスルな感触に思わず口からため息が漏れる。初めてペニスを受け入れるその中は、まだ狭くペニスを押し戻そうと抵抗してきた。

炎厨矢(きつくてスルスルで……この処女のマンコの抵抗感、最高過ぎるっ)

抵抗に負けないように腰に力を入れ、未開拓の膣道を我が分身で切り開いていく。

リディア「あっ、ああっ! んああ、あんっ……はあ、あああ……んくっ、ああ……あんっ!」

窮屈な締めつけに快感を覚えながら、つぶつぶと腰と突き入れている。気が付けば龟头が彼女の初めての証に届いていた。

リディア「んああああっ!! お、奥まで、先輩の……届いて……ああっ、熱い……んんっ、はああんう」





「ンふう……匠さんが望めば……レロレロ、ちゅぷっ、アナルマンコも……差し出すことを……誓います……んふうっ、じゅぷっ」

リディア「先輩のおチンポ汁と……私のおっぱいミルクが……まじやっで……ンン……とってもエッチな気分になっちゃいます……ああんっ！」

とても切なそうな表情で、一生懸命チンポをくわえ込むリディアちゃん。赤黒い亀頭の先端がおっぱいの中からスルッと逃げないようにきっちりと挟み込んでいるのだが、おっぱいのたわわな弾力が反則なくらいに気持ち良かった。

リディア「んむんんっ！ ちゅう……んっ、んふう……べろ、れるっ……んんっ」
ああ、チンポの先っぽが唇と舌とおっぱいに犯されているな……はううっ。

リディア「はむっ……せんふあいつ……きもひいいれすか……じゅぶじゅぶっ……ンンんっ！ はぶうっ……やあんンんっ……ンんっ！」



「せ、先輩っ……こ、この格好……おチンポ入ってるどころ……全部見えちゃってますう……」

乳首はこれ以上ないくらいに勃起していて、早く気持ちよくしてほしいと言わんばかりだ。俺は、そんな大胆な乳首を指で押ししたり、つまみ上げたり、指先で弾いたり、はたまた擦りあげちゃったり。そして、股間のほうではクリトリスの包皮を向いてからつまんだり、指で挟んで転がしてみたり……。リディアちゃんを感じさせるため、思いつく限りの方法で刺激していく。

炎厨矢「リディアちゃん、色んなところからエッチな汁が溢れてきちゃってるよ？」

リディア「ああんう……い、言わないで……恥かしくて、おかしくなっちゃう……ああっ、んう、ひゃあああんっ！」



吸えば吸うほど溢れ出てくる母乳の味に興奮が冷めず、精液がリディアちゃんの膈内を白く染め上げていく。それに対抗する急激な締め付けと精液を搾り取るような動きがたまらなく気持ちいい。

リディア「ああ、なか……精液でいっぱい、気持ちいい……せ、先輩……もっと出してえ……」

リディアちゃんは吐き出される熱いほとばしりに感極まって瞳をとろけさせおねだりしてくる。

炎厨矢「ああ、任せろっ！」

エロ可愛いおねだりにこっちも脈打つように精液を注ぎ続ける。そしてしばらく経って、ようやく射精がおさまるがペニスは固いまま。まだまだ萎える気がしない。

リディア「匠先輩……んっ、その……も、もう一回……したい、です……んっ、んっ……」

どうやらまだまだ興奮が冷めないのはリディアちゃんも同じなようで、ペニスを啜えたまま再び腰を動かし始める。



「ひゃっ……お尻のワレメで、先輩のおチンポ、ビクビクって動いて……あああっ」

「た、匠先輩っ、あ、あの男性の方……
んんっ、こっちちを見てます……んんふうっ」

リディア「せ、先輩……恥ずかしいです、みんな……私たちのこと、じっと見てます……」

まるで一人一人が人格を持っているような表情を持った、実体化している幻影の視線がリディアちゃんに向けられる。

炎厨矢「そんなこと言っていないよ。これからリディアちゃんは、公衆の面前でお尻を俺の股間に擦りつけながら、キスするんだよ？ これはリディアちゃんの悩みを解決するための痴女特訓なんだからね」

リディア「そ、そんな……痴女なんて……」

炎厨矢「ほらっ、リディアちゃんが興奮するように俺がおっぱいを揉んでいるから、大丈夫だよ、ね？」

おっぱいを揉んでなにが大丈夫なのか不明だが、とりあえずリディアちゃんを励ます。

リディア（匠先輩が……私のために頑張ってくれてる……私も……私も、痴女にならなきゃっ）

リディアちゃんは意を決したように、肉感たっぷりのお尻を股間に押し付けてくる。

炎厨矢「よし、それじゃあ特訓を始めよう」

リディア「はいっ……んんっ、ちゅう……れろっ、ぢゆるるうっ！」

奮起したリディアちゃんは躊躇なく俺の唇を奪い、舌を潜り込ませてくる。





リディア「ああああっ、ま、まだでてりゅ……おくしゅりザーメン……子宮が、いっぱい……パンパンになっひやいますうっ！」
再び流れ込んでくる熱い奔流に悦びと幸せの表情を見せるリディアちゃん。

炎厨矢「う、うう……まだっ！」

股間をぴったりと密着させ、一滴残らず子宮のなかにぶち込む。結合部から納まりきらなくなった白濁が床にこぼれ落ちていく。

リディア「ああ、んんっ……せ、せんせいのお薬い……癖になっひやいますう……んああ……」

炎厨矢「まったく、精液中毒のマンコにはまだまだ治療が必要だな」

リディア「は、はい……これからもいっぱい治療してください……先生……」



「ああああああああああっ!! も、もっこれがなくてらめえ……せんせいのおくしゅりないと……満足できなくなっひやうううっ!!」



リディア「ううんっ……先輩の赤ちゃんの素……びゅくびゅくって……たくひゃん入ってきますう……ああん」
リディアちゃんの中でたっぷりの中出した俺。射精したあとも、うねうね搾り取ってくるような柔肉の動きがたまらなかった。

リディア「はあ、はあ……んふう……んっ、んっ、んっ、ああんっ！」

炎厨矢「中にいっぱい出したのに、リディアちゃんのマンコ、誘ってきてるなっ」

リディア「ああん……先輩のわんぱくチンポ……まだ、大きくなってるよ」

相当ほしがりマンコになってしまったリディアちゃんに、抜かずの2レース目を挑む俺。次は、フリースタイルでマンコの中を思い切り泳いでやるぜっ。

「ああんっ……先輩、
はあはあ……ああ、私のおマンコ
あんなに広がってる……
ああ、先輩、恥ずかしいです」



リディア「あっ、ふぐうっ……私の……おチンポに……誓いの言葉……ああん……先輩、聞いてください……ふああん」
 喘ぐリディアちゃんからのお願いと目の前でたゆたうおっぱいがさらに興奮を誘う。
 リディア「はあん、リディアは……優しく、エッチで、頼りになる……あなたに出会えたことに……感謝し……はぐっ、ンっ」
 子宮口を激しく突き上げられながらも誓いの言葉を一生懸命唱えるリディアちゃんが愛しくてたまらなくなる。
 リディア「あぁっ、ンっ……あなたの妻として、一生愛し続ける事を……はあはあ、ンっ、誓いますううっ、ああああんっ！」
 炎厨矢「誓いの子宮にキスっ……濃いのおっぱいイクぜっ」



「あはあっ……先輩の……熱いチンポロザリオが……おまんこ幸せにしちゃうのおっ……あっ、あああんっ」





さっきから母乳を噴いて弾むこのけしからんおっぱいが気になって仕方なかった。母親なのになんなんだ？ この若くてピチピチな乳輪と乳首はっ！ サキュバス最高かよっ！

リリダ「ああん、匠クン、かわいいわよ♪……リディアの赤ちゃん頃を思い出しちゃうわっ……ああん。ああんっ……もうっ……ベロベロしながら、奥までほじってえ！……もっと、人妻牝マンコ、虐めてちょうーだいっ！」

言われなくてもこのおっぱいは男を完全に幼児退行させ、赤ん坊のようにチュウチュウ吸わせてしまう魔力があった。

リリダ「ああん……ママもうっ……早く、早く出してえ、匠クンのチンポミルク、ゼロ距離射精で人妻牝マンコに食らわせてえっ！」

そんな淫猥な言葉を並べる母親には、遠慮無く中出してやるぜっ！

リディア「はああんっ、先輩、私も……私もイっちゃう、イっちゃいますうっ!! あああああっ!!」

リリダ「あああ、ああん……イク、イっちゃう……ママの牝マンコイっちゃうううっ!! あああああっ!!」

「ふうう……私が、先輩を……かまいたいですっ」



中二病を患っているJcupヴァンパイア

カシュニア＝ブラッド＝クラウゼル

Kashnia Blood Claussell

[CV: 綾音まこ]

身長: 157cm

スリーサイズ: B100 / W55 / H85

困っている人を見ると放っておけない性格で、後輩の面倒見が良いユリドラシル魔法女学園2年生。明るく元気だが少し残念な思考回路を持つ。プライドが高く怖い物知らずなため、自ら危険なことに首を突っ込み不運な目に合うことが多い。生死に関わるわけではないが発情してしまうので、十字架やニンニク、聖水を苦手としている。

「そ、それにしても、ほんと綺麗に
こんがり焼けちゃったわね……
さすがアタシっ！これが偉大なる
ヴァンパイア様の力よ。なっっっはっはっはっは」



制服

クエスト

裸



「そ、そんなあ……困るう……
あっ……ああっ……
た、たくさん、湧き出してきてる……
真っ白な……アタシの
おっぱいミルクう……!」



カシュニア「ひゃぱっ!? あっ、あぶっ、んぶぶぶっ……なっ、なんなのっ……あ、熱いっ! ぶひゃああああッ!!」
おっぱいの中で精液が弾け飛び、カシュニアの顔面にシャワーとなって降り注ぐ。いきなり白く熱いものを大量に浴びて、カシュニアは混乱しているようだ。

カシュニア (な、何これ? これが噂に聞く“ぎーめん”ってやつ!? こ、こんなに出ちゃうのね……!)
カシュニアは驚愕しつつも、頬を赤らめ初めての体験にときめいているようにも見えた。

カシュニア (う、ううっ……思った以上にネバネバしてて、濃い感じ……こ、これがアタシのアソコに入ったら、子供が出来ちゃうの……?)



(ああッ……ダメええ……もう逃げられないよう……
チンポが入ってきちゃう……こ、怖いのに……アタシ、
どうしてこんなにドキドキしてるのっ……!?)



待ち構えていたように俺の唇を吸って、カシュニアは自分から舌を絡めてくる。口の中が驚くほど熱くなっていて、舌を差し込んでいるだけでじんわりと汗をかいてしまいそうだ。

カシュニア「んふうう……くちゅっ……ン……れろ……じゆるっ……むちゅぶちゅっ……くうん……」
カシュニアの身体から少しずつ力が抜けていく。だいぶりラックスしてきたようである。

カシュニア (くうんっ……ヴァンパイアだからって、どんな杭にも弱いわげじゃないのに……身体の奥に入ってくるコイツの杭が……シンンンっ……たまらない!)
炎厨矢「動いていいか?」

カシュニア「き、聞かれても困るう……はああっ……ンう……あ、頭が、ポーッとしてきてるの……はあ……はあ……ンうう……」





「くひやあああつ、ンわあつ……ああんっ、乱暴にしにやいれ！
ああつ、な、中、削られひゃう……うっうっうっあああッ！」

カシュニア「あひやああつ！ イクっ！ ああつ、イクううっ！ あはああんっ、イクっ、あああつ、イクうううっ!!」

カシュニアが絶頂の淵に堕ちていったのと同時に、俺は彼女の体内にビュビュッと白濁液を撃ち込んだ。

カシュニア「くひゃっ……あああつ、き、来てるっ、ンはあつ……子宮にたっぷりっ、ひやはああつ、流れ込んできて……うあああつ、しゅごいっ……ンン！」

さっき射精したにも関わらず、大量の精が子宮に注がれていく。

カシュニア「んうううっ！ あはああつ、あつ、くうっ……ンンっ……ドロドロのが……いっぱいお腹の中に広がって……ひはああつ、あつ……ンンううっ！」

子宮の中で熱い奔流が暴れ回り、カシュニアに強烈な快感を与えているようだ。陰唇をひくつかせながら、最後の一滴まで飲み干そうとするカシュニア……のマンコである。白いものが媚粘膜にベッタリと付着して、なんともエロい姿を曝け出していた。

炎昐矢「なんかもう、すっかりイヤらしいマンコになったなあ……俺のエネルギー全部吸い取ろうとしてるだろ？」





カシュニア「はふっ、ひゃふっ……くはあっ！ ああん、太いのねじ込まれてるう……あはあっ、ンンふうっ……な、何も、考えられにやくにやっちゃうっ……」

炎厨矢「どうせ普段から何も考えてないだろうっ……いつもの感じでもっとヨガっちまえっ！」

カシュニア「くっ……オ、オマエはいつも失礼しゅぎるッ！ い、偉大なりゅヴァンパイアの前にひざまずけ……って、ああふうっ！ んくっ、はあっ、ンンっ……」
乳首を口で吸い上げてやると、それなりにおとなしくなるから面白い……いや、可愛い。大きな乳房を堪能しつつ、バンバンと小気味良い音を立てながら容赦なく腰をぶつけていく。ねっとりとした愛液が龟头にまとわりついてくるのがわかった。カシュニアも相当、感じてきているようだ。

カシュニア「んあふっ、あっ……あっ、あっ、あ、ああっ、んああっ……ンンっ、硬いのが、一番奥によほう、んくううっ、つ、突いてきてりゅっ……はあん！」
俺がおっぱいを吸うたびに敏感に反応するカシュニア。膣壁がもっと鬨って欲しいとばかりに、ヒクヒクと蠢いている。

炎厨矢「むちゆるる……れろっ、れろろろろろろっ、ちゅぱっ、ちゅぱっ！ ちゅぱちゅぱっ!!」

カシュニア「はあん……げ、下品な音たてて吸わないでよお……ち、乳首っ、ジンジンして……はあっ、うんっ、か、感じすぎちゃうう……！」



(あっ! あっ! あっ!
ああっ! くふうっ、ンン……
ンンっ……す、すごいっ……
突き上げられてるっ……
子宮がっ……はふうン……
切ない……ッッ)





「ああっ……オ、オチンポっ……オチンポ……硬くて……太いの……ンっ……
入れられたいよ……また……あの時みたい……ンっ、くふうン……」



カシュニア「こらあっ！ いつまでくつついてんのよ、汚らわしい！ とっとと出ていきなさいって……あっ、はあ……いやあん、変なモノ擦りつけないでッ！」

炎厨矢「汚らわしいとか変なモノとか……お前の身体はそれを求めてたんじゃないのか?！」

カシュニア「ぬぁに言ってるのよ！ そんなわけないでしょ？ アタシは普通に惰眠を貪ってただけだしっ！ んあっ!? や、やだ……動くなっ、はひっ！」

俺の肉棒はすでに恥丘を押し広げ素股状態で密着していた。しかも、部屋で覗き見していた時からフル勃起中なので、血管がビキビキに浮いている。喋りさえしなければ可愛いカシュたん和棺桶の中で二人っきりなのだから、腰を動かすなというほうが無理というものだ。

炎厨矢「めちゃくちゃ熱くなってるし、すごい濡れてんじゃん。これ、どうにかしないと眠れないだろ」

カシュニア「ふああんっ……よ、余計な……お世話だしっ！ 早く、どきなさいよっ……アタシを誰だと思って……ああん、擦っちゃダメえっ！」



ダーニャ「そんな……匠さん、ダメですう……指が奥まで……にやふうっ……カシュニア様に叱られてしまいますうっ……あああん」

炎厨矢「目の前にこんなヌルヌルな、尻尾付きのおマンコで誘われたらご褒美あげるしかないでしょ？」

カシュニア「はうん……あ、あたしは……別にっ……フン……あああんっ！」

炎厨矢「なら……カシュニアの嫉妬マンコ、たっぷり抉ってやるぜっ……そらそらっ」

カシュニア「はぐっ……あんた、何、調子によって……あっ、あっ、あっ、あっ、あああんっ！」

カシュニアが言い終わらないうちに先ほどよりも激しく打ち込む俺。あんなこと言っても幾重もの膣壁がしっかりとチンポを包み込み子宮の奥へ引きこもうと蠢動していた。

アリーシャ「ツンデレなカシュニア唇に、嫉妬ペロチューよ……シン、ちゅる……ちゅぶ、ちゅ、ンンっ！」

カシュニア「ああっ、アリーシャ……んんふうっ、ンンっ……シン」

アリーシャの官能的なペロチューを受け、舌を弄ばれるカシュニア。アリーシャがカシュニアの舌を吸い上げて舌フェラをしてあげるたびに、膣全体がうねるように大きく弾みチンポを甘美に刺激してきた。

炎厨矢「すげーチンポ突っ込まれて、引いても吸いついて来るぜ、ホントにヴァンパイアの吸血マンコは最高だぜ」

カシュニア「ああんっ……くっ、こんな変態のチンポなんて……んひやうっ……あああんっ！」



「ああ、ダメ、そんなとこいっぺんに責められたらっ……おマンコおかひくなくなっちゃうっ！ああんっ、だめだめ、イクイクいっっちゃうっ!!!」





「ああン……アンタの変態チンポ……オッパイの中で……
どんどん大きくなってくわよっ……どぶするのよっ……ンンっ」



ナスターシャ「ママ、今の射精で完全にスイッチ入っちゃったわ……匠クン、今度は私のおマンコでタマを転がしてあげるわあん……フフっ」

カシュニア「ちょっとママ、何勝手にはじめちゃってんのよっ!!」
母親だが抜け駆けしないでよっ! と言いたげに突っかかっているカシュたん。

カシュニア「ああン……私もっ……あ、あんたの乳首かんであげるから早くイキなさいっ! ちゅぷっ」

炎厨矢「ふおおっ! もう競技終わってるけど………許すっ!!」





プライドが高く負けず嫌いなLcupダークエルフ

ナオミン = イヴァ = ルシル

Naomin Iva Lucille

[CV: 綾野莉音]

身長: 167cm

スリーサイズ: B99 / W56 / H94

L-cup

純情でマジメなユリドラシル魔法女学園2年生で、炎厨矢のクラスの学級委員長。恋愛に疎く性的な関心も低いが、排卵日になると発情して淫乱になってしまう変わった体質の持ち主で、その秘密を守るため授業を休むことも。アホの娘に好かれる体質でもあり、日頃から苦勞が絶えない。人間の男はみんなスケベだと思って嫌っている。

「相変わらずブレない変態ねっ！これだから人間は！」



FACE COLLECTION



制服



クエスト



裸



「ちょ、ちょっと、タクミ! 何を一人でニヤニヤしてるのよ!?
ヒマなんだったら、助けられてあげても構わないわよ!」



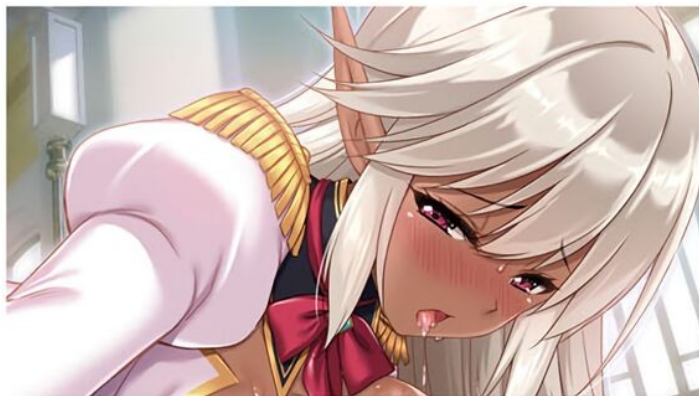
ベロラシアンが、夢中になってミルクを吸いたてる。
ナオミン「ちょっ……ど、どうなってるの? どうして急に……ふあっ! あっ……あっ……ンンンっ、す、吸われてるっ……おっばい……あふうらんっ!」

炎厨矢「こいつは魔力とミルクを一定量飲まないと解放してくれないんだろ? だから、たっぷり飲ませてやればいいんだよ」

ナオミン「そ、それぐらい知ってる! 聞いてるのは、どうして急に私、母乳が出てきてるのかって……ことなだけで……って、ひゃっ! ひゃふんっ!」

母乳が出始めたことにより、ますます吸引が激しくなっている。ナオミンの乳首には、さっきよりも強くツタが絡みついてた。よく見ると、茎の部分が母乳をポンプのように吸い上げているのがわかる。両乳首から母乳をズズッと吸われ、ナオミンは髪を振り乱して暴れようとした。もちろん拘束されているので暴れることなど不可能だ。





指でグチュグチュと膣穴をほじくりながら、乳首にピッタリと吸いつき、力強く母乳を吸いまくる。

ナオミン「んきひいっ!? はっ、はうああん! も、もうっ、ずるいわよ! う、上と下、両方だなんて……んああっ、あっ……ンンンっ!」

炎厨矢「両方ってだけじゃねえぞ! 指は一本じゃないんだからな……ほれっ!」

俺は中指を膣に突っ込んだまま、人差し指を伸ばしてクリトリスをグリグリと弄び始めた。

ナオミン「んきやあんっ!? やっ、やあん! はっ、はひいっ……そ、そこはらめえっ! い、いやあん!」

プラス、親指をアナルにあてがひ、円を描くように刺激してやる。手がつきそうになってるけど頑張る。男には無茶をしなければならぬ時がある。

ナオミン「んっ! ひゃあああっ……らめらって、言ったりゆのにつ……あはああっ、も、もう怒ったわ! 容赦しないんらからあっ!」

炎厨矢「ふぐむうっ!」

ナオミンは俺の顔の上にムギュッと乳房を押し当て、ものすごいスピードで手を上下させた。

炎厨矢(ひ、卑怯だぞ!? 呼吸を制御するとは……って、あっ、あっあっあっ! もうダメかも……!)

「ふふっ……はあ、はあうっ……ど、どうかしら? ひとたまりもないでしょう? 人間のオチンポなんて、私の手にかかったら……うふっ! うふうっ!」





「う、このままりゃと……お、おかひくなりゆの……我慢れきにやいのよう
……ら、らから、お願い……お願い……お願い……つ、突いてえええ……」

ナオミン「……ねえ、ねえ、動かにやいの？ ンっ、ンン……べ、別にわらひはこのままれもいいけど……ン、ふうん……ううっ、んあっ、はあ……」

じれったいのか、ナオミンはキュウキュウと膣内を締め付けて、腰を密着させてきた。アへってるくせに、この期に及んでまだ強がっている。

炎厨矢「いやー、動き方忘れちゃったなー。おねだりされたら思い出すかも……まあ、お前も別にこのままでいいんだろ？ じゃあ問題ねえよな？」

ナオミン「ふええ!? しょ、しょんなの、困るう……う、ううっ……」

炎厨矢「なんで？ さっきそう言ったじゃねえか。違うんなら、どうして欲しいかちゃんと言ってみるよ？」

膣奥まで肉棒を詰め込んだまま、さらにグッと押し込むように腰に力を込める。瞬間、ナオミンの身体がピクンと跳ね上がった。子宮口を刺激されて反応している。

ナオミン「はひやっ！ あっ……はうん、そ、それ、もっと……あう、ンンっ、あっ……あっ……お、お願い、もっと……あああん、もっとおお……」





ナオミン「ふああっ……そ、そういう意味じゃ、ないの
にっ……くっ、こ、これだから人間の男は……くうん
っ、バ、バカだっというのよ……あっ、や、やあん」
ようやくナオミンらしくなってきたので、俺も調子
が戻ってきた。しかし、結果的に焦らしたおかげ
で、ナオミンの膣内はとんでもないことになってい
た。入れたと同時に粘ついた愛液が絡みつき、
グチュグチュと音を立てている。シャワーの音に
掻き消されて聞こえないとナオミンは思っている
だろうが、しっかり俺の耳にも届いている。

炎厨矢「こんなに濡らしやがって……我慢できな
かったのか？ 委員長のくせに淫乱なんだな」

ナオミン「う、うるさいわねっ……んはっ、ああん
……は、早く抜きなさいっ……こ、こんなの……
イヤっ、ダメっ、ゼツタイっ……ふああっ……はあ
んっ！」

おクスリの乱用防止キャンペーンのキャッチコピ
ーのような言葉を口走りながら、ナオミンは申し
訳程度に俺の腕の中で暴れる。

ナオミン（くうっ……か、硬いのが奥まで……
はあっ、はあっ……さ、さっき、見た、あんな……
太いのが、根元まで私の中に……んうっ……あ
はあん……）

断続的に甘い声を漏らしながら、ナオミンはキュ
ウキュウと俺の肉棒を締め付けてくる。



「きゃああああっ!? だ、だからっ、あちこち動かさないで!
その手を放しなさい! し、下のほうも、小さくしなさいよ!」



「あっ……ああっ……んんんンンっ……ふうっ……
こ、この私が、動いてあげるなんて、ンンっ！
特別なんだからね……？ あうっ、ンっ、はあうっ！」



ナオミンは艶めかしく身体をくねらせながら、俺の上で腰を跳ねさせている。窮屈な膣内をなおもキュウキュウと締め上げているのは、俺の肉棒を押し潰そうとしているんだろうか。

ナオミン「ふわあっ……ああっ、はひいっ……お、奥まで、大きいの届いてる……ンっ、うっ……ああん……あ、頭の中、痺れてきてりゅう……」

ナオミンは腰の位置を調整して、自分的に敏感な箇所を亀頭に擦り付けてきた。ザラツとした感触が亀頭で感じられる。Gスポットのあたりか？かなりそのあたりが気持ちいいとみえる。

ナオミン「はあ……あっ、あっ、ああっ……当たりゅ……ンっ、先っぽが……気持ちいいとこ、ツンツン突っついてりゅう……はああん……ああんっ！」

静かな保健室に、ナオミンの喘ぎ声が響いている。誰かが来たらヤバイんじゃないかなと思うが、ナオミンは気にしていないようだ。

「放つといてよ……
べ、別に、人に見せるために
お手入れしてるわけじゃ
ないんだから……って、
だから顔を近づけないでって
言ってるのにいっ……!」

炎厨矢「こんなにウマイとはけしからん……ちゅううっ
……委員長なのに、風紀が乱れまくってるなっ……ちゅう
ちゅう♪」

ナオミン「ううう……おっぱい吸いながら……言わないで
よ……変態っ! こ、これだから人間の男は……はあっ!
ン……ンンっ……はあっ、はあっ……」(ひゃひいいン……
乳首ちゅうちゅうされてるう……ミ、ミルクも、いっぱい出ち
ゃってる……ンンっ、私の身体……どどんおかしくされ
ちやう……! ふああっ……で、でも、どうしてなの……周
りに人がいるのに……見られてるのに……はふううっ、ゾク
ゾクしちゃうンっ……!)

ナオミンは真っ赤になって息を弾ませながらも、立ったまま
じっと耐えている。もともと真面目な性格なのが、こういう
時は役に立つ。

炎厨矢「おっぱいから……ちゅうちゅう……ミルクが出るほ
うが変態だろっ……ちゅうちゅう……学生らしくない乳首
にはお仕置きだぜっ……むちゆるじゆるちゅう」

ナオミン「きゃはああ……い、いやっ……変な吸い方しな
いでよお……あっ、ううっ……ミルク搾られちやう……いっ
ぱいあふれちやってるうう! はああああん!」

炎厨矢「おっぱいミルクが甘すぎるぞ……まったくスケベ
な味だな……委員長のくせに……」





ナオミン「ひゅあああっ！ オチンポミルク入れられてりゅううー——っ!!」

俺の精を受け止めて、ナオミンがガクガクと全身を震わせた。その表情は喜悦に満ちあふれている。

ナオミン「んっ、あっ……あの時と、おんなじい……オマンコにたっぷり精液……注がれて……んっ、はあ……ああ……ふわああああ……」

炎厨矢「あっ……ううっ、ちよっ……あうっ……」

肉ヒダがビクビクと蠢いて絡みついてくる。射精したばかりの肉棒が締め上げられ、揉みくちゃにされて、再び強制的に勃起させられていく。

炎厨矢「こ、ここまで来たら……徹底的にお見舞いしてやるぜっ!!」

ナオミン「はあ、はあっ……あっ、ちよっと……はううっ!？」

「きひいんっ! ち、乳首らめえっ! オ、オチンポ入れられながら乳首っ、ンンっ、吸われたりゃ、ンンンっ、わらひっ、ンンっ、ンンっ、くうん!」

さらにムンムンさんのケツを激しくチンポで突き上げるように挿挿してやる。

ムンムン「んはうっ……ああん……あ、あん……ううっ!」

ムンムンさんがこれ以上ないくらいだらしな顔になってチンポを存分に味わっていた。

ムンムン「ああん、中でどンドン……んはあん……大きくなってるのっ」

炎厨矢「とてもこの生意気な娘を産んだおマンコとは思えないほど、ドピンクなヒダがめくれちゃって……吸い付いてくるぜ」

ナオミン「あん……だ、誰が……生意気なのよっ!」

俺の言葉にナオミンが可愛く反応する。

ムンムン「ふたりとも……ほんとに仲がいいのね……ママ安心したわ……はあん」

炎厨矢「ああっ……ムンムンさんっ……せっかくの人間の男の精液なんで、一滴残らず受け取ってくださいっ」

ムンムン「ああん……キテキテ……ふあん……いっちゃうううっ、あああっ!!」

ナオミン「わあん、ママ……ダメ……あいつにイクとこ見られちゃううっ、あはあん!!」



「高貴なダークエルフが、こんな男のチンポで、メロメロになっちゃ……ダメなの!」



温厚で慈悲深いTcupアーケプリースト

カトレーヌ = エ = ロマンシア

Catherine E. Romancia [CV: さやまひさこ]

「お、おかしいわね……どうして男性の大事な部分が……こんなに腫れちゃうのかしら……? は……はあ……はあ……」



治 癒系魔法が得意なユリドラシル魔法女学園の3年生。保健委員のため、魔導身体測定を生徒個別で受けていたりもする。実家が教会の他に保育園を生業としていることもあって、慈悲深く信仰心が厚い。規則には厳しいが“懺悔”されたりすると、ドスケベなことでも大抵許してしまう。体質として、母性を刺激されると母乳が出る。

身長: 165cm

スリーサイズ: B123 / W56 / H85



制服



クエスト



裸

FACE COLLECTION





「あはああっ……良かった……
いっばい出してね……
私のおっぱいに遠慮なく、精液ドバドバ
出してすっきりしてください！」



名残惜しかったが、先輩の可愛い口から肉竿を抜くと、俺は少し上体を起こした。そしてガチガチに硬い剛直をズンとおっぱいの谷間に突き込んだ。

カトレヌ「ひゃん!? 匠クン?」

ペニスが完全に先輩のおっぱいに埋まってしまった。いわゆる縦パイズリというやつだ。これができる爆乳の持ち主が目の前にいるのだから、やらないわけにはいかない。

炎厨矢（くはあっ! や、柔らかな肉に、全部隠れちゃってる……!）

先輩の唾液と母乳、そして俺自身のカウパーでヌルヌルになった肉槍は、びっくりするほどよく滑った。滑りすぎて谷間から追い出されそうになるので、角度に気をつけながらズボズボと突き込んでいく。

カトレヌ「ひゃああんっ、ダ、ダメえ……変なことされたら、乳首、擦れちゃって……ふぁあん、ミ、ミルクが搾られちゃいますっ!」





「も、もう……どどん
大きくなっちゃうね……
匠クンの……んふう……はあん
……本当に……暴れん坊さん
なんだから……ンうう……」

カトレーヌ「んくっ、はあっ、ン……んああ……んふう……す、すごいわ……私の胸で、どどん太くなっていく……はああん……ああん……」

炎厨矢「はあはあ……先輩の乳マンコ測定……ヤバすぎますっ……お、俺、もうじき……出ちやいそう……」

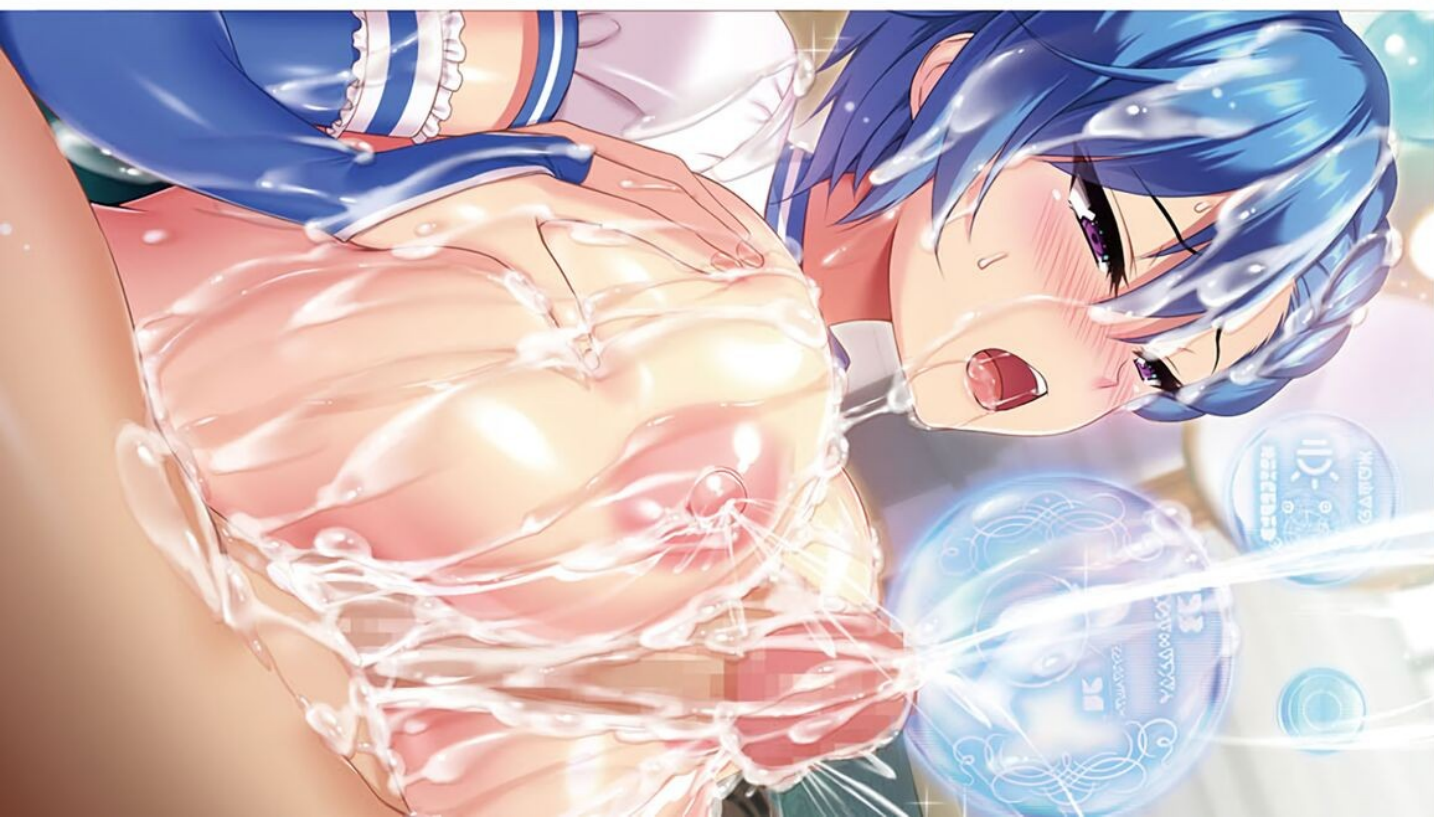
たゆたゆんと波打つ二つの肉の間に、俺の男根は真っ赤に荒ぶっていた。双肉の左右からの圧迫感がとても強い中、強引に腰を前後させて肉棒を往復させているので、快感がどんどん高まってくる。真っ白な母乳と先輩のさっきフェラしてくれた時の唾液、そして俺自身のカウパーがネチョネチョと混ざり合い、滑りを良くしている。ツンと尖った乳首がかり首に当たっているのも気持ちいい。なんかもう、何もかも気持ち良くて天国にいるみたいだ……。

カトレーヌ「んああ……はああ……ふああっ……はあ……ダメです……乳首、そんなに擦ったら……私……ン……はあっ、んっ……んうっ……」

カトレーヌ先輩も興奮しているようだ。頬を紅潮させ、目をトロンと蕩けさせている。気のせいか、身体全体がピクン、ピクンと震えているように見える。

炎厨矢「あっ、あっ、ああっ、もう……イっちゃいますよ!」

カトレーヌ「わ、私も……ですっ、ああっ……恥ずかしい……イっちゃう……おっばいでイカされちゃうっ! ンンっ、あっ、あっ! んひやああああッ!!」





先輩の中でビュクビュクッと剛直が脈動し、先端から熱い液体を吐き出した。

カトレヌ「ひはああああっ！ ふあっ……ああっ、な、中に出されてるうっ！ んっ、くはっ、あああっ、いっぱい出てるっ！」

俺の中出しを受け止めた先輩の腰がグッと引き攀り、それに釣られて膣内がギューウウッと縮まった。

炎厨矢「んううっ!? あっ……おっ、ううっ、めちやくちや縮まるっ……！」

カトレヌ「はひいっ……こ、この感覚っ……うああっ……天に召されてしまいそうな……ああああっ……ふあああっ……ん、はあ……はあ……」

やばい俺の御神体がまだ、成仏できていないせいか、まだカトレヌ先輩のマッコに未練が残っているか一向に衰える気配を見せない。俺はマッコへの未練を断つために、再び先輩の子宮の奥に向けて腰を打ち込み始めた。

カトレヌ「きゃひっ!? ああっ? 待って……ダメですっ……」



「熱くて硬いのが、私の中を往復してるう……ああ……なんだか下半身がビリビリしてきて……んんっ、身体が浮き上がりそうです……あああ……」





「あはあっ……良かった……
いっぱい出してね……私のおっぱいに
遠慮なく、精液ドバドバ出して
すっきりしてください!」

熱いほとばしりを体内で感じて、カトレス先輩はその身体を大きく弓なりに反らした。まるでバレリーナかフィギュアスケーターみたいにきれいなけ反り方だった。

炎厨矢「はあっ、はあっ……」

先輩を正面から抱き締めて、俺は荒くなった呼吸を整える。先輩もくたびれただろうと思い、そのまま支えていると……何やら下半身をもももどと動かしてファッ!? となる俺。

カトレス「ンン……あんなに激しく動いたから……ちゃんと計れなかったでしょ……? も、もう一度……もう一度、測定しますからね……?」

いや、それは構わないけど! カトレス先輩ってこんなに肉食系だったっけ? もっとこう、たおやかで儚げないイメージだったんですけど!? しかしッたばかりのモノを膣内でクイクイと刺激されていたら、もうそんなことはどうでもいいのか、肉食系最高! 的な考えにチェンジしてきた。

カトレス（ああっ……私ったら、こんなに淫らにおねだりしたりして……ンン……こんなこと……神が知ったらどう思われるか……ああっ、でも……ンン……）

まだ迷っているかのような先輩に、俺はわざと意地悪く聞き返す。

炎厨矢「せ、先輩……エロすぎですよ……こんな淫乱なおっぱいプリプリのプリーストは、神が許さないのでは?」

すると、先輩は少し逡巡した後、恥ずかしそうに目を逸らしながら呟いた。

カトレス「ンっ……た……た……た……今、神が許してくれました……!!」





「きひいいいっ……ま、魔力が、胸から吸われて
……んっふうんっ……んっくうんっ！ ふああっ
……はあ……ち、力がどんどん抜けちゃう……」

なんと、先輩のおっぱいがいっぱいおっぱいで元気……ではない様子で、クラークの触手が絡みつき、大変なことになっている。どうやら吸盤が乳首に吸いついてしまっているらしい。先輩の見事な乳房がそれぞれ違う方向に引っ張られて、いびつな形に変形していた。

カトレヌ「いやぁん、見ちゃダメですっ！ ……は、早くっ、手を貸してっ、匠くん！ 魔力を吸われて魔法が使えないの……ふわぁん！」

炎厨矢「俺にはおっぱいを吸われてるようにはしか見えませんが……」

カトレヌ「はうっ……そ、そんなこといいから……早くっ!!」

どうやらこの世界のスライムクラークは、獲物を捕食するわけではなく、魔力を吸い取ってしまうようだ。カトレヌ先輩はもうMPが残っていないのか、触手に巻かれてグッタリとしている。彼女自身、こんなバトルをするのは初めてのようで、かなり混乱しているように見える。

炎厨矢（そ、それにしても！ この光景は……）

今、目の前で繰り広げられている状況は、まさにパソコンの中でさんざん目にしてきた2次元が、3次元で再現されているという感じだ。

カトレヌ「うああっ……はぁん……あっ、ああっ、ち、乳首が、ふうん……ひ、引っ張られて……あうあん！ こ、このままじゃ、私……ひうらん!!」





「しょ、しょんなあっ……私は神に仕える身にゃのにい……こんな、変にやことしゃれて、感じりゅわけには……うああっ……ンくふああっ……」



カトレヌ「きっ、気持ちいい……気持ちいいの！ 匠クンのおチンポが、しゃいこうに気持ち良くて、わらひ、もう……狂っひやししょうらのおおつ!!」

ようやく先輩は素直になってくれた。お淑やかで高貴なアークプリーストが、浅ましく腰を振りながら俺のチンポをアナルに咥え込んでヨガっている！

炎厨矢「カトレヌ！ もっと感じて！」

カトレヌ「はあっ、はあッ、いいっ！ ああ〜〜……匠クンのたくまひいおチンポれ、アニヤル犯してえっ！ もっと……ンンッ、もっと！ もっとおおつ！」

炎厨矢「くううっ、いいのかわ？ もっと肛門ほじくられたいのかわ？ 神様に怒られるんじゃないのかわ？」

カトレヌ「んひいいっ、たった今！ 神がっ！ お尻によ穴れイッてしまうことを！ ゆるひへくりえまひたあぁーッツ!!」

炎厨矢「カトレヌ！ で、出るうっ！ お尻の穴にっぱい……うううっ、出す！ 出すぞッ！」

カトレヌ「ひゃあああ！ 来てええっ！ わらひもイキしょうにゃの！ お尻れイッひゃう！ お尻アクメきひゃう！ ひゃあああああ、恥じゆかひいいい！」



「やああん、恥じゆかしいっ……あああっ、ママと一緒に
おっぱい出しちゃってりゅ……はひゃあああんっ！」



カトレヌ「んひゃあっ!? あっ……ンン、らめえ、しょんなどこ、はあう
ン、きたにやいわ……おてて、拭き拭きしなきや、らめよう……はああ
ああっ……!」

軽く指先をアナルに埋め込んだだけで、二人は甘い声を漏らした。

ロレーヌ「はううっ……ンっ、ンっ……しょうがないわねえ……もっと
お仕置きしてほしいのね……? オチンチンムギムギされたいの
から……んふう……」

こっちの攻撃が激しくなれば、向こうもガシュガシュと竿を扱き上げ、
ホニョホニョとキンタマを弄んでくる。母乳の出も激しくなったような
気もするし、興奮しすぎて頭がクラクラする。

カトレヌ「はひゅっ! はひゅう! ひゃあんっ、ああっ……ン
っ、お、おっぱい、吸っちゃらめえっ、ふああっ……はあ……も、もう、
らめ、ああああん!」

ロレーヌ「ああ……おっぱい出ちやう! んくっ、ふああっ……ああ
っ、ン……たっくんにお乳あげながら、イっちゃうらん!」

カトレヌ「うう……ママばかりずるい! 私だって……は
むちゆく……べろべろっ、ンン……れろりゅぶる……あむむむ
っ」

炎厨矢「あひいいいっ、せ、先輩っ……ちゅぶりゅううっ、あ
むっ、れろれろれろろえろろっ!」

もはや興奮しすぎて何が何やらわけがわからず、俺は目の前に
ぶら下がっているカトレヌ先輩の乳首にむしゃぶりついた。

カトレヌ「はあああんっ! きっ……気持ち……いいっ!
うああんっ、もっとお! 匠クン! もっと私のおっぱい、エッ
チにいじめてえっ!!」

炎厨矢「はむっ、ちゅばちゅばっ、れ、れも、ひえんばい! こ
んな淫らなことしたら、神ひやまに怒られほうなんれふけろ
!?!」

カトレヌ「た、たった今、神が許ひてくりえまひたああっ!
あああっ、はひっ、ンっ、はうんっ……ち、乳首っ、あふうん、
しゅごい感じりゅのおおっ!!」

「ふーん、どうぞご自由にっ!
私は私で、匠クンのこと、あやして
あげてるからいいもの……ねっ、匠クン!?!」





恩人のお世話をしたいMcupマジックドラゴン

ミャウ = オルフェル

Myau Orufaru

[CV: 結城ほのか]

身長: 155cm

スリーサイズ: B103 / W54 / H83

大好物のスイーツが目当てで、メイド喫茶でバイトしているユリドラシル魔法女学園1年生のドラゴン娘。瀕死寸前の怪我をして迷い込んだ世界で介抱を受け、命を救われた過去があり、“ミャウ”はその際に彼女自身の鳴き声から付けて貰った名前。そんな忘れられない恩人の炎厨矢と異世界で再会したことに、運命を感じている。



「ご飯にしますかっ?」
それとも……いやぁーお風呂にしますかっ?
なにいわせるんですかもううらやま」
匠さん

Myau Orufaru

FACE COLLECTION



制服

クエスト

メイド

裸



「ああっ……ミヤウ、匠さんをきちんとイカせてあげられそうですか？ んはあっ……あはあん……」



ミヤウ「あ、あぶっ……んっ、あっ、う……ンンっ、ごくっ……ごくっ……」
 口を開け、躊躇なく俺の放った精液を口腔で受け止めるミヤウ。口に入り切らなかったザーメンは、ミヤウのおっぱいの谷間にドブドブと溜まっていく。

ミヤウ「あっ……んぶっ、あむ……匠さん……ンンっ……ごくん……ミヤウのおっぱいと……おくひ、こんなにいつふあい……ううっ……んっ、うらん……」
 口の周囲に飛び散った精液の塊を舌でペロリと舐め取り、ミヤウは嬉しそうに微笑む。

ミヤウ「ああん……んっ、ごくっ……しゅっごく濃いれふ……♪ ンンっ……ペろっ、ペろちゅむ……ンふう……はあ……おいひいれす……」

炎厨矢「はああ……ミヤウ……」

ミヤウ「ンンっ……おっぱいに中出しされちゃったので……おっぱい孕んじやうかもしれませんね……♪」



ミヤウ「あっ、あっ、ああん……ミヤウは……ミヤウは……あの日、助けてもらった時から……匠さんにこうされたかったのです……ンンっ……ちゅっ……！」

ミヤウが夢中になって俺の唇を求めてきた。俺はその想いに応えるように唇を重ね、同時に少し腰の動きを遅くしようとした。

ミヤウ「あむうっ、ンンンっ！ らめ！ らめれひゅっ……ちゅむむっ、ちゅっ！ ゆっくりにしちや、らめれひゅよう！ ンむむっ……れろれろっ！」

炎厨矢「ダメだろっ……動いてたら舌、噛んじまうだろっ？ 危ないから……んむっ!？」

ミヤウの舌が俺の唇を割り開き、中に入り込んできた。情熱的な動きで俺の歯や歯茎をペロペロと舐め回す。

ミヤウ「んむふっ、んれろっ、れろっ、らいりょうぶれふ！ ミヤウはケガしたりしまへんよお！ らから……ンっ、ンンっ……おねがいひゅ！ キスを………」



「ふわああ……ミヤウ、ついに体験してしまうのですね……しかも大好きな匠さんに捧げられるなんて……はうう……幸せですう……」





炎厨矢「くはっ……ン」

期待を裏切らない強烈な締め付けに、俺は思わず喘いでしまった。

炎厨矢「ミャウ……ミャウのケツ穴、気持ち良すぎて……相当やばいぜ……！」

ミャウ「にやうう……ミヤ、ミャウも、こんにゃの……ンっ……初めてにゃのに……ふうっ、ふううっ、ン、ふああっ……あ、あはああっ……。はあん、ンあっ……き、き、気持ち良くて……ンううっ……おかひくなっちゃいそうでしゅうう……ふああっ……ひやううん……ンンっ……」

ミャウは俺をもっと良くしてあげようと思ってきているのか、入口を締めたり緩めたりの動作を繰り返している。

炎厨矢「無理なくていいぞ。苦しいんじゃないのか？」

ミャウ「ンふうっ、ン、くううっ……らいらようぶれしゅ……こうしゆるほうが、私もラクにゃのれす……ううっ……はあああ……ああ……ンンう……」



「はあっ、はあっ……う、ううっ……
匠さん、あの……ンン……
お、お尻で感じちゃっても……
うう……ミャウのこと……
嫌いにならないでくらしやい……」



「ああん……匠さんに大事なところを見られてます……
ンンンっ……ああっ……匠さん……私のアソコ……
どうですか……？ うううっ……あああ……」

小さなお尻にブスリと肉棒が刺さっているというのに、ミャウは一所懸命俺に奉仕しようとしている。

ミャウ「お、お尻にゃのにつ……すごく感じて……チ、チンポの形が……はっきりと……ンンっ……伝わってきちゃいましゅっ……はああ……くふうん……」





「はうっ……ち、違い……ますよお……ミャウは真面目にお掃除を……って、
 ああっ、やあん……匠さん……邪魔しちやダメです……ンふうう……」

ミャウ「た、匠さんっ……あああん……匠さんの……ンふううっ……ああ……つ、強くて……立ってるだけで……ンんはあんっ！んううっ、あっ……ン！ あひいっ、きゃはああっ、ズボズボされたらミャウ、変になっちゃいますよう……ああっ、ひああああっ！」

小鳥がさえずるように喘ぎながら、ふわふわの柔らかなツインテールを揺らすミャウ。シャンプーの香りが鼻腔をくすぐって、嫌でも欲情させられてしまう。どうして女の子のこういう匂いは下半身にズクンとくるんだろうか。

炎厨矢「ミャウ……オマンコの奥の奥までたくさんチンポで磨いてやるからなっ！」

ミャウ「ひいっ……ああん……お掃除はミャウの役目なのに……うう……匠さんにいっぱい磨かれちゃいますう……ンっ！ あっ……はひいっ、ンっ、あっ……うあっ……ああっ……ひゃはあっ！ しゅ、しゅごいっ……当たってりゅっ！ い、一番奥にっ、コンコン当たってきてまひゅっ……はわあああっ!!」

ハードに打ち込むたびに、ミャウのかかどが床から浮いてつま先立ちになる。

ミャウ「ああん……ふひゃああああっ！ 子宮に先っぽがガンガン当たって……あ、頭が空っぽになっひゃいまひゅっ！ ミャウ、おバカさんになっちやうっ……」



ミャウは両脚をグッと踏ん張った。お尻の筋肉がキュッと収縮し、当然オマンコの中もきつく締まる。

炎厨矢「ミャウっ！ すげえ締まる！ 最高だぜっ」

ミャウ「はぐうっ……あっ、ああああ……ンンンンっ！ 匠さん、いっぱい気持ちよくなってもらしゃいねっ……ミャウと一緒に……ひゃはあああ……ンっ！」

炎厨矢「ああ、一緒にイこうな！ 今度はたっぷり子宮に吐き出してやるからな！」

ミャウ「あうあっ……あああああっ！ らしてくらしゃいっ！ ミャウの子宮、匠さんのしえいえき漬けにしてもらひゃいっ！ あはああっ……ああんっ！」



「そんなことないですっ……ど、どうしても私、その……匠さんの匂いがするところに居たくて……つい、調子に乗ってオマンコ擦りつけてしまいました……」



ミヤウ「んひっ……あっ、はあうっ……!」
わずかにピクピクと身体を震わせるミヤウ。ひきつったような声が唇の間からこぼれている。
炎厨矢「どうしたミヤウ? 入れただけでイっちゃったのか、今?」
ミヤウ「はあん……だってえ……いきなり気持ち良すぎて、ミヤウ、イっちゃいました……シンっ……はあ、はあ……くうん……」
炎厨矢「お仕置きなのに先にイったら駄目だろ」
ミヤウ「あっ、そ、そうでした、すみません……あああっ……でも……ミヤウは匠さんのチンポで……ああっ、シンっ……か、身体が……トロけちゃいそうです……」
炎厨矢「パンストに穴開けられてチンポ突っ込まれたら、そりゃあトロけそうにもなるだろうな……それっ」
俺はミヤウの秘洞の感触を味わうように、ゆっくりと抽挿する。スルスルとぬめる膣ヒダが、チンポを柔らかく包み込んだ。
ミヤウ「んひいっ……あっ、はあ……ああっ……カリ高のチンポがミヤウのオマンコ擦ってますっ……シンんうっ、あっ、ンン、ンんっ……うっ、はううっ!」

ディーレ「アナルなんて……あの人も入れたこと
ないのにな……ああん……匠のチンポはホン
トに変態ねっ！」

ミャウ「あん……お母様、匠さんを褒めないでく
ださいっ、私がいっぱい褒めるんですからっ」

炎厨矢「変態とか、褒められてねーしっ！」
二人のポンコツな会話を聞いていると、いまこの
チンポをがっちりと締付けて悦んでいるアナル
に、キツくお仕置きを試みたくなった。まるで、
クロールの動きを再現するように、ムチムチの尻
に向かって打ち込んだ。

ディーレ「ああん……駄目え、お尻クロール……
感じ過ぎちゃうっ！」

ミャウ「ああん……お母様ったら、はしたなさす
ぎですよ……た、匠さん、わ、私にも……後で
その泳ぎ方教えてくださいっ」

一応、水泳教室の体をなしているな……(汗)。
ミャウには、マンコの中で指をフリースタイルで
泳がせている。ニチュニチュと音をたててスベス
ベマンコが指を離すまいと食い締めてきていた。
指の締め付けを感じているだけでもさっきまで、
苦しそうなお顔を浮かべていたディーレさん。だ
が、今はもう打ち込むたびに目にハートを浮か
べ、自分から尻を俺に押しつけて悦んでいた。

ディーレ「ああ、またイっちゃう、お尻ではしたな
くイっちゃううう……ああああっ!!」

「はあはあ……できれば
弟にしてくださいお母様っ、
妹だったら
私と取り合いになって
しまいますのでっ」



月の国のお姫様で、好奇心旺盛なQcup魔法使い

兎月姫 かぐや

Kaguya Uzuki [CV: 君島りさ]

身長: 166cm

スリーサイズ: B114 / W55 / H84

Q-cup

月の国から魔法を学ぶため転校してきたユリドラシル魔法女学園3年生。竹を割ったように元気で明るいお姫様だが、かまって貰えないと拗ねるカワイイ一面もある。在学中に魔法薬の資格を取ろうと頑張っていて、特に熱を入れる媚薬の研究では自分の肉体で実験をすることも。その影響で隠れヘビーオナニストになってしまった。

「ダメよっ。男子禁制の神聖な場所なんだから……でも、そういう禁忌な場所ってなんだか燃えるよね」



FACE COLLECTION



制服

クエスト

裸



**「はあはあ、もうぐちゅぐちゅ……
 おチンポ欲しいですって……
 おマンコ泣いてるみたいなのお……
 ひいうんっ！」**

かぐや (うそお……今、手が……ええっ……や、やあん……ダメ……うううらん……あうっ)

見えない手に局部をまさぐられ感じるかぐや先輩。

かぐや 「はあ、はあ、はあ……あああん……らめえ……らめえ……どうしてえ、薄本読み過ぎで……おかしくなっちゃったのかしらっ……あん」

パンストとパンティに手をかけぐいっと引き下げる。こんなに濡らしてたのかよっ！

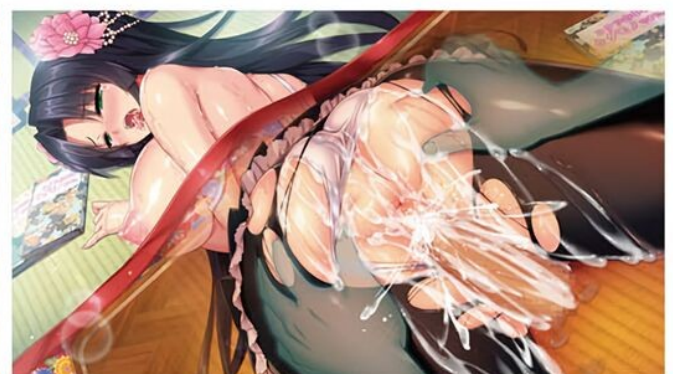
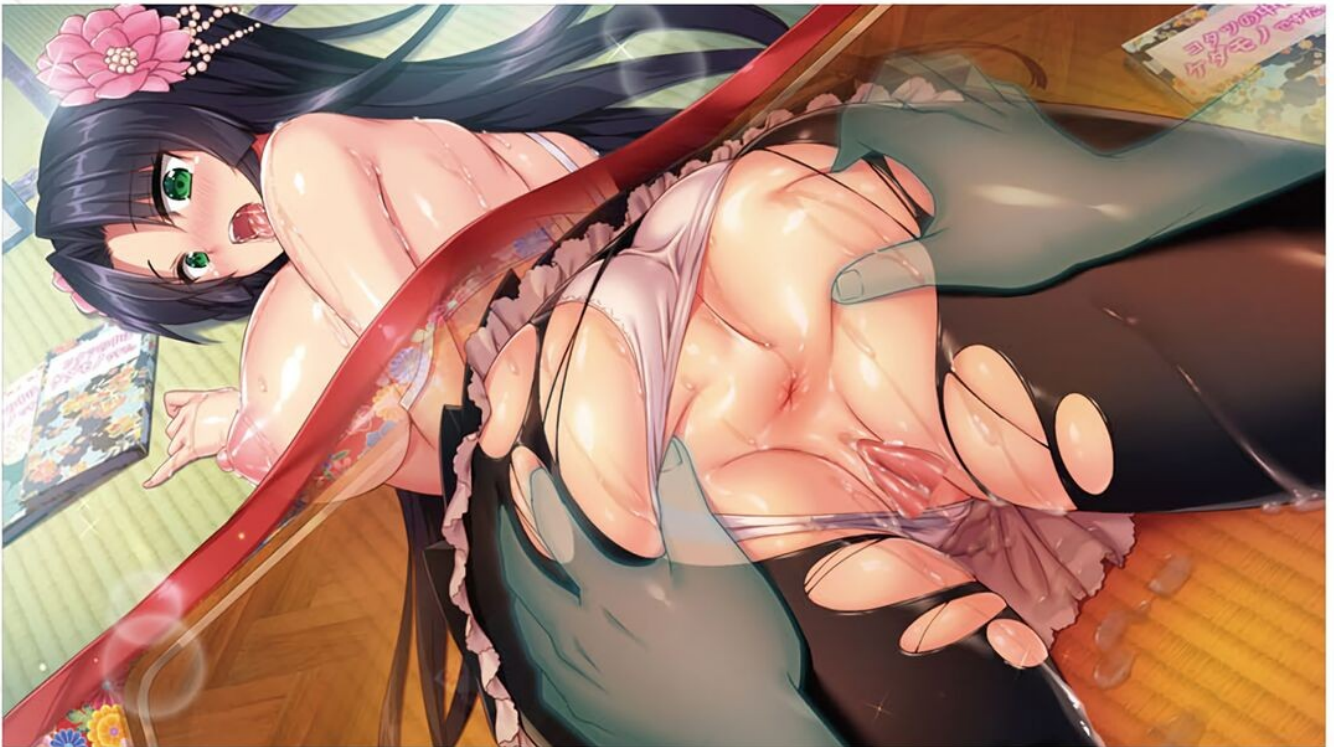
かぐや 「や、やあん……ちょ、ちょ、ちょっと、パンティ、取らないでえっ……いやあん、ああああっ！」

こんなに糸引いたら指を入れずにはいられないっ！

かぐや 「あああっ、ンン、んひいっ！」

今度は……同人誌と同じく舌で攻めてやるかっ！

かぐや 「ひやあっ……こ、今度は……触手？ なに……なんなの？ し、舌？ うはああああんっ。ふああんっ！ し、舌が入ってる？……あっ、あっ、あっ、やああっ……ンんっ！ め」



かぐや「ああああっ！ 身体のなかも外もザーメンまみれで……ンっ、くうううっ！」

上と下からザーメンをぶっかけられ、すっかり快感に溺れてイキまくるかぐや先輩。そんな彼女のいやらしい表情に俺も欲情が抑えられず、何度も脈打つようにして子宮に精液を流し込む。

かぐや「いやぁん……チンポまだ硬く、で……せいえき、止まりやな……ああああっ！」

おさまらない射精に応じるように膣壁がひくひくとチンポにハグしてくる。その感触がなんとも言えないくらい気持ちよくて、興奮が冷めやらない。

かぐや「ンっ、はぁはぁ……こ、こんなにザーメン……ああっ……ぜ、絶対赤ちゃんできひや……くふうっ！」

炎厨矢「そりや、自慢の子宝御神体ですからねっ」

かぐや「ああああ……匠ちゃんのせえしが、私の卵子にくっついちゃう……孕んじやうよお……」

そんな風に言いながらも、どこか嬉しそうな表情を浮かべるかぐや先輩。



「ああああ、た、匠ちゃん……こ、これじゃ……修行どころじゃなくなっちゃ……あああっ！」





「あああっ……わたしのラブマンコ、
激しくちゅかれて……あらひ、
イキたがってりゅのおおっ！」



かぐや「ああん……子宮がザーメンでパンパンになっひやっりゅのお、まら、思いっきり中らしされちゃった……はあはあ」
大量におマンコの中で射精した精液を逆流させながら、満足な表情を見せるかぐや先輩。
かぐや「ふぐう……子宮の中……っビュクビュクの精液が染みこんでさちやうのが……わかつちやう……あ あ あっ」

お尻とオマンコの同時責めにさらに激しく喘ぐかぐや先輩。オマンコはチンポを溶かすくらい熱くなり、絡みつくようにうごめいていく。

かぐや「あああっ、んくうっ！ 匠ちゃんのうさぎさんが……子宮を……突き上げてまひゅっ……んむんっ！」

炎厨矢「うさぎじゃなくて、亀さんですけどねっ！」

すっかり降りてきている子宮口と龟头が何度もぶつかる。あと少し降りてきたら龟头が子宮のなかに入ってしまうようだ。

かぐや「んっ、ああっ、あっ……はあはあ、ああっ……んっ、ああっ、いやああんっ！」
お尻や膣の柔らかさとはまた違った異様な感触に先端が包まれ、なんとも言えない快感を込み上げてくる。それを何度も味わいたくて、一心不乱に腰を振りまくっていく。



「ああんっ……
も、もうそ、そんなに強く叩いちゃ
……ダメなの……あああっ！」



「あああああつ……
出ちゃってるう、奥から
ザーメン……逆流ザーメン
きもちいいのお！」



かぐや「あああああんっ！ お尻の穴にチンポ……じゅぶじゅぶ入って……来ちゃううっ……やああああんっ！」

蕾のような穴にチンポをねじ込み、ゆっくりと処女アナルを開拓していく。

かぐや「んく、ああっ……んっ、あつ、あつ……やああ、ああああんっ！」

相当チンポが欲しかったのか、初めての割りにすんなり飲み込まれてしまう。というかむさぼるようにチンポを締め付けてきてるし。

炎厨矢「先輩のアナル……すげー気持ちいいっ」

かぐや「あつ、あああつ……お、奥まで入ってきて……んく、くああああつ！」

快感のままに腰をあげていくと、気づいたときにはチンポが全て飲み込まれてしまった。オマンコとは段違いに窮屈で、チンポが握りつぶされてしまいそうだ。俺は下腹から沸き上がる欲望に逆らうことなく抽挿を始めた。



「ああ、お母様のおマンコが匠ちゃんのチンポで、あんなに荒々しく突かれてるなんて……シンっ」

美竹「はぁあっ……ああんっ……見ないで、見ちゃ駄目よ……こんなはしたない格好で……恥ずかしいわっ……ああんっ」
 かぐや先輩の母親の美竹さんは、先輩と同じく長い黒髪を振り乱しながら俺の膝の上で腰を悩ましく踊らせていた。

美竹「ああん、だめえっ……おチンポの先がコンコンノックしてくるのぉ……ああっ」

美竹さんの中、突き上げるたびにキュンキュン締まってくるっ！

かぐや「ああん……お母様のここから……私が生まれたのね……今は、匠ちゃんのおチンポがずっぼり入っちゃってるけど」といいながらかぐや先輩は、美竹さんと俺の結合部分をうっとり顔で見つめていた。

美竹「駄目よ……そんなに間近で見ちゃ……ああん」

美竹さんのおマンコっ、急に締まるしっ……はっ、くっ！ 見られてさらに感じてるなっ！ 美竹さんの締付けに感化されチンポもますます興奮し、柔肉の中でどンドン体積を増していった。

美竹「ああん……太くて、腰が蕩げちゃうっ……ああん、いひっ！」

俺も、気持ち良くてチンポ蕩けそうっ！

かぐや「やあん……お母様の見ていたら……私も……匠ちゃんのおチンポ欲しくなってきちゃった……はぁはぁ」

かぐや先輩は愛液を滴らせながらムッチリとした太股をモジモジと擦り合わせていた。





ツンデレな甘えん坊のIcup雪ん子
【おとなっぼいモード時はRcup】

雪乃小路 みぞれ

Mizore Yukiinokouji

【CV: 八尋まみ】

「匠にい？ 大丈夫なの？
またエッチな本読み過ぎて
夜更かししたの？」

身長: 148cm

スリーサイズ: B99 / W53 / H80

【おとなっぼいモード】

身長: 160cm

スリーサイズ: B114 / W56 / H88

FACE COLLECTION

【おとなっぼいモード】



雪の国からユリドラシル魔法女学園にやってきたシャイでおとなしい1年生。毒舌家で負けず嫌いな一面があり、炎厨矢に子ども扱いされると、一時的に肉体を成長させるスキル“おとなっぼいモード”を発動させ、見返すように誘惑したりする。いつも持ち歩いている謎の雪だるま型カートは近接戦闘用の鈍器として機能することが多い。



FACE COLLECTION



クエスト

裸



制服

クエスト

裸

「はあはあ、んあんっ……
匠にいの専用の
若妻おっぱいマンコで
イっちゃいなさいなのっ
……ん、んぐうっ」

みぞれ「はあはあ、匠お兄ちゃん、みじよれ、みじよれ、イっちゃったの……ンンっ」
炎厨矢「イっちゃっても、まだまだイクよおおおっ……ペロペロペロペロペロペロ」
みぞれ「ああっ……匠お兄ちゃんっ……感じすぎて、腰が跳ねちゃうの……っああん！」
みぞれちゃんが泣きそうな声になりながら、俺の舌から腰を逃がそうとする。がしかし、想定済みなので尻肉が驚掴みした指の間からぶっくりあふれ出るような感じががっしりと、尻をロックした。
みぞれ「ああ、んぐう……あっ、あああっ……あんっ……ひやあああっ！」



みぞれ「匠にいの……またイっちゃう、みぞれ、イっちゃうの……ああっ、お兄ちゃんっ、お兄ちゃん、お兄ちゃんっ、あああああっ！」
止めどない想いと快感が入り交じったように、尿道から黄金水を決壊させるみぞれちゃん。
みぞれ「あああんっ……あ、ああん、匠にいの、みないで……オシッコ……でちゃったの……はああん」
炎厨矢「駄目だっ、しっかり、みぞれのしいーしいーしてる姿、見てやるからなっ」
他人が見たらまるでトイレのない場所で、妹の用を手伝っている兄妹に見えるかもしれない……(汗)。どちらにしても変態に思われるのは俺の方だがっ。
みぞれ「匠にいのあちゅあちゅザーメン……みぞれの子宮の奥まで届いてるの……はあはあ」



「んはあ……匠にいの赤ちゃんの素……
いっぱい上がってくゆの……あふうん、はあはあ」



ブルブルンと弾む下乳を思い切り驚掴む。

みぞれ「ああああんっ！ 匠お兄ちゃんっ？ お、おっぱいつぶれちゃうのっ、あっ、くうううっ！」
相変わらず中毒性の高すぎるおっぱいだ、この柔らかさ……まったくもってけしからんっ。

みぞれ「んっ、あ、ああっ……あ、んんっ……はあ、はあ……あん、んむんんっ！」

反発性抜群のふわふわおっぱいを、形がいびつになるくらい思い切り揉みしだく。白い乳房もピンク色の乳首や乳輪も……いびつになった形のどれもがイヤらしく見えて興奮を抑えられない。

みぞれ「やああんっ、ああっ……オマンコ突かれながら……おっぱいも揉まれて……ああう、あっ……んああーっ!!」

陰と胸の同時責めが気持ちよすぎて腰が逃げそうになるみぞれちゃん。

炎厨矢「腰が逃げてるぞ……いますごく気持ちいいんでしょ？」

みぞれ「だ、だって匠お兄ちゃんが……んう、みぞれの身体、めちゃくちゃにするから……あっ、あっ……なにも、んんっ……考えられないんだもん……あんっ！」

炎厨矢「とろけきった牝顔になって……すっかりエロくなったな。それならもっとめちゃくちゃにしてやるぞっ」



（ああん……匠お兄ちゃんに、みぞれの
恥ずかしいところ……全部、見られてるの……）





「う、うん……するの……で、でもそんなにじっと見られると恥ずかしい……そんな飢えた狼みたいな目でジロジロ見ないでなの……」

みぞれちゃんに近づいて、絆創膏の張られた秘部に指でツンとしてみる。

みぞれ「ん、ああ……あつ、ンンっ……はあ、んくう……」

炎厨矢「なるほど、これが御札の感触……クニクニ」

みぞれ「やああ……あ、ンンっ……匠にい……だ、だめ……ンンう！」

鼻にかかった声で制止してくるみぞれちゃん。それにしても、指先から伝わってくるこの極上の反発感。絆創膏越しでもたまりませんなあ。

みぞれ「にやうっ……ああん、も、もう……そ、そんなにぶにぶにしちゃ……ああっ、ひやああっ！」

このいつまでも触っていたくなるような中毒性、まるで緩衝材のプチプチを潰しているときみたいな感覚だ。

みぞれ「ん、ああ……あつ、ンンっ……はあ、んくう……」

みぞれちゃんの制止を無視して、欲望のままに絆創膏をツンツンする。そのたびにみぞれちゃんの声がどんどん甘ったるく、煽情的になってくる。

炎厨矢「もっと深く押ししてみたらどうなるのかな……どれどれ？」

むにゅうと強く指を押し込む。

みぞれ「ふにゅうっ……匠にい……だめだって……言ってるのぉ……あつ、ひやんっ！」





おお……そんなに小さなお口で先っぽ啜
えて……カワイすぎだろっ。

みぞれ「ちゅう、っはあ……匠お兄ちゃん
のオチンポ……エッチな味がする。みぞれ
……なんだか身体が熱くなってきちゃった
……ちゅぷ」

チンポの匂いと味でみぞれちゃんも興奮し
てきたのか、舌使いがさらにいやらしくな
ってくる。

みぞれ「んっ、れろ……ちゅ、ちゅびい……
んっ、んんっ……ちゅる、れろんっ……」

生温かくてねっとりした感触が亀頭の先
端を滑る。

炎厨矢「うあ……くっ」

舌先で鈴口やカリ首を突いたり、龟头を
啜えて全体的に舐めまわしたり、想像以
上の快感に思わず上ずった声が出てしま
う。というか、いつの間にかフェラが大変
お上手になられているではありませんか
っ、みぞれちゃん！

みぞれ「ん……ちゅぷ、れろれろっ……
ちゅ、ちゅばあ……匠お兄ちゃんの先っぽ
……どんどん大きくなってきてるよ……ちゅ
ううっ」

「ムう……も、もう、
しぶといなのっ……
絶対に匠お兄ちゃんのオチンポ……
みぞれのおとなっぽさで
メロメロにするの……れろっ」





みぞれ「あああつ、キツくて……痛いくらいなのに……な、なんでこんなに気持ちいいのお……はあ、はあ……」

炎厨矢「それはみぞれちゃんがまたひとつおとなになった証拠だよっ」

みぞれ「う、嬉しい……はあ、んう……匠お兄ちゃん、もっとみぞれをおとなにしてえ……」

炎厨矢「ああ、いくぞっ」

窮屈すぎるアナルに抱きしめられながら、抽挿を始める。

みぞれ「んっ、ンン……はあ、あつ、ンう……はあ、はあ……ンあああ……」

みぞれちゃんの少し苦しそうな喘ぎ声が鼓膜に染み込んでくる。アナルの窮屈さに相まって、これまで以上に興奮と快感が高ぶってくる。

みぞれ「ああ、んくう……あつ、ああああつ……あんっ……ひゃあああつ！」

みぞれちゃんの脚が小刻みに痙攣して、表情もどんどんイヤらしくなっていく。



「やあ……見ちゃらめえ……お漏らし見ちゃ……
ああっ、止まって、止まってえ……」





自分のなかから熱が抜けていく感覚の上から、じんわりと温かい感触が広がってくる。

みぞれ「あああつ、お、奥まで……お兄ちゃんのも上がつきて……だ、だめえ……オシッコ止まらなくなっひやうっ……んむんんっ」

中出しの快感も同時に受けて、もう自分を抑えきれないみぞれちゃん。俺に強くしがみついて、ただただ快感に身体を打ち震わせていた。

炎厨矢「ぐう、みぞれちゃん……まだ出すよっ」

外へ出ていくオシッコの代わりに出したてホヤホヤの精液を子宮に注入してあげる。

みぞれ「はうううっ……匠お兄ちゃん……しゅごい、あちゅいよお……あああつ!!」

陰内をかけ上げる精液の感触に快感を覚えて、お漏らししまくるみぞれちゃん。その姿に俺も興奮を抑えられず、もう出なくなってしまうまでお漏らしマンコに精液を注ぎ続けるのだった。

みぞれ「はあはあ……い、いっぱいお漏らししちゃったの……そ、それに……中出し、も……いっぱい……んふう……」

炎厨矢「オシッコ出し過ぎで、カップから溢れちゃってるよ?」

みぞれ「そ、それは……匠お兄ちゃんが……みぞれにあんな……おとなっぽいことするから……にゅう」

恥ずかしそうにして、ちょっとカワイくすねるみぞれちゃんの頭をポンポンと撫でてあげる。

「はあはあ……しゅ、しゅごい……匠お兄ちゃんの……
赤ちゃんの素でいっぱい……ひゃあああつ!!」



「あああん……匠お兄ちゃん、みぞれの感じちやうとこころ……よく分かってるのっ……きやふんっ」

みぞれ「はあん……みぞれ、おねえちゃんになっちゃうの？ あああんっ」

深雪「あ、あつ、……ああ、そんなママまた孕んじやったのっ!? あはあん!」

深雪さんへ挿入しているチンポへの心地よい押し返しがたまらんっ。チンポを押し込むたびに、膣壁が幾重にも重なり収縮し、まるでチンポがたくさん女性の舌で舐められているような感覚を味わっていた。

深雪「あっ……ああっ……んっ、ンンっ」

擬似的な妊娠なので、遠慮無くガンガン子宮を突き上げてやる。本当の妊娠ではないけど、こんな若く美しい母親を孕ませ、セックスしている禁忌に近い行為に激しい興奮を憶えていた。おなかこんなに大きくしているのに、あんなチンポ大好きな顔を見せるんだ……。

みぞれ「あっ……ンんっ! あっ、あっ……あああんっ、あ、ああ



あっ……ふああ!」

舌の動きに合わせてみぞれちゃんのお尻が顔の上で踊っている。子猫が親猫に甘えるような喘ぎ声に、深雪さんに挿入しているチンポがピクピクと興奮に打ち震えていた。

深雪「くああっ……ああんっ、はああん……ああんっ」

産道を押し広げ、激しく出し入れされるたびにエロ魔法で擬似的に妊娠しているにも関わらず、何か生まれそうな……そんな快感の高まりを下腹に感じていた。

深雪「あああん……またイク、イっちゃう……はしたない母親でゴメンなさいっ……はああああんっ」

みぞれ「ああん……みぞれもイっちゃうの……ああああんっ!」



「センパイ、ニヤニヤしてますが……何を考えてるんですか？」
（フィー）



「あっ……んふっ……ふ、ふん、何よ……三人もいるからってこんなに大きくして、みっともない。これだから人間の男は……」（ナオミン）

妙に視線を感じるとしたら、ナオミンがジト目で俺の顔を見上げていた。顔を赤く火照らせて、チラチラと俺の顔と肉棒を交互に見つめている。

炎厨矢「何だよ、ナオミン。お前もやりたいのか？」
からかうように尋ねてみると……。

ナオミン「はあ!? そ、そんなわけないでしょ? こんなダメ男相手によくそんなことできるなあって、不思議に思ったとこよ」

フィー「どうぞ、ナオミン先輩。わたしは最後でいいので」
フィーが冷静に対処する。こっちのほうがよっぽど精神年齢が高い。

炎厨矢「悪いな、ミャウ。また後でな」

ミャウ「「はい! 匠さんがそうおっしゃるなら……」

明らかに不満そうにナオミンから目を逸らすミャウ。目が据わっていて怖い。下手したらこの部屋が火の海となるかもしれない……



「いやぁん……もう、イノシシみたいに腰振って……
懺悔しちゃってるの……ああンンンっ」(カトレヌ)



カトレヌ「ああんっ……子宮降りて来ちゃってるう……あっあ
っ、イクイクイク、ああ……オチンポで私……天国にいつちゃう
うっ、あああああっ!!」

かぐや「ああっ……匠ちゃんっ……あああっ……そのまま出
して、そのままおまんこにびゅっびゅしてえ……あぐううっ」

炎厨矢「んっ……い、イクっ! あああっ!!」

二人の膣道がきゅううううと締まったかと思うと、激しい射精
感が襲ってきた。

カトレヌ「はああ……匠クンのロザリオから精液が……こ
んなにいっぱい子宮の中で懺悔してるの……はぁん」

かぐや「ああん……匠ちゃんのチンポミルク……あちゅくて
……ガクガク震えちゃうのっ……はうっ、ああん」

「はああ……ほ、ほんとに節操のない……チンポだなぁ、
こんなに精子ぶちまけて……ちゅぷっ、あむ」(オルガ)

英玲奈「ああ……私のおっぱいでこん
なに欲情したの? チンポからこんなに
濃いミルクが……ほんとに変態ね」
一番悦んでいそうなオマエが言うなっ!

カトレヌ「ああ、私もミルク……乳
首から射精して、ああん……止まらない
のお」

フィー「先輩の……オチンポ、こんなに
たくさん射精して……フィーのおっぱいも
先輩のせいで……たくさんミルク出ちゃ
いました」

カシュニア「はああ……私にことわり
もなく何こんなにだしちゃってんのよっ
……こんな見せられたら……ンンふ
う」

ナオミン「ほんとに、人間の男のチンポ
は……あむ、ちゅぷっ……だらしがない
だからっ、ああんっ」



「はぁンっ……今日はあなたの誕生日なんだから……おマンコの奥にたくさん出してね……ンっ」(英玲奈)
「はっ、はっ、ンっ……オークに種付けされてる女騎士を思い浮かべて、マンコに打ち込めっ……はぐっ、このチンポ、たまらんっ……ああンっ」(オルガ)



「はぐっ……はぁはぁ……先輩のおチンポが……やぁン、わんぱくすぎて、感じちゃいますっ」(フィー)
「あぁっ……赤ちゃんのお部屋、ゴリゴリされて……はうっ、ンんっ……おマンコ悦んでましゅっ……はふううんっ」(リディア)



「匠さんっ……匠さん……ああンっ、ミャウのお誕生日子宮にたくさん、赤ちゃんの素、中出ししてくださいね……ああン」(ミャウ)
「あなたのチンポなんか……ああン、ンっ……絶対感じてなんか……あげにゃいんだからっ……んはぐっ」(ナオミン)



「あぁンっ……カトレヌ先輩っ……ホントにおっぱいっ大きいのねっ……このおっぱいがアイツを誘惑するのねっ……かぶっ、ちゅぶ」(カシュニア)
「あぁっ……子宮の奥にいっぱい懺悔しなさいっ……白いオチンポミルクでたっぷり中出し懺悔しなさいっ……ああああっ」(カトレヌ)



「んんっ……んふう……ちゅぶっ……ああン……オチンポっ、無理矢理入ってくる感じで……おマンコ悦んじゅううっ」(かくや)
「にゃふう……ンっ、はぁン……匠にいのチンポで、どうしてもエッチな女の人みたいな……声、でちゃうのおっ……ああン」(みぞれ)

「あああつ……やあん……身ごもっているのに……
ホントにお前は容赦のない……変態だなっ、あああん」
(オルガ)



英玲奈「汝、健やかなるときも ハメるときも……ああん」
オルガ「キスのときも フェラのときも……はあはあ」
ミャウ「んっ、シックスナインのときも、アナルセックスのときも……きゃふう」
リディア「ああん、これを楽し……あつ、あつ」
ナオミン「はあん……敬い……んふう」
カシュニア「はあはあつ……慰め遣え……んんっ」
カトレーヌ「共に舐め合い……ああん」
かぐや「その命ある限り……はあはあつ」
フィー「チンポに尽くすこと」

みぞれ「誓いますか？」
炎厨矢「誓いますっ!!!!」
全員の誓いが終わり、みんな子種を再び欲しがっていた。
カシュニア「はあはあ……あなたのロザリオチンポで、私のおマンコにザーメンたっぷり、だ、出さないよねっ……ああん」
英玲奈「はっ、はっ、……あなたのザーメン……甘えんぼのおマンコにたっぷり注いでっ……はあんっ」
ウェディングドレスを着ているせいで、テンションが上がりみんなのおマンコにチンポ指輪を差し込んでいく。





マリイ

M a r i e

[CV: 綾音まこ]

身長: 170cm
スリーサイズ: B118/W58/H99

勝ち気で男勝りなオーガ族で、魔導女子相撲部に所属するユドリラシル魔法女学園の3年生。



セリカ

C e l i c a

[CV: 七瀬あかり]

身長: 161cm
スリーサイズ: B111/W55/H93

魔導テニス部所属のユドリラシル魔法女学園1年生。明るく優しい気高いエルフ族のお嬢様。

N-cup
Celica

ルミア

L u m i a

[CV: 海音ねう]

身長: 161cm
スリーサイズ: B122/W58/H96

見知りか激しいメデューサ族のユドリラシル魔法女学園1年生で、美術部に所属している。



T-cup
Lumia

Exciting Sub CH



ミルファ

M i r u f a

[CV: ハツ橋きなこ]

身長: 154cm
スリーサイズ: B95/W54/H86

魔導バレー部所属のミノタウロス族の少女。小動物的な性格のユドリラシル魔法女学園1年生。

I-cup
Mirufa



システィーネ

S i s t i n e

[CV: 月森ねね]

身長: 160cm
スリーサイズ: B101/W56/H87

ユドリラシル魔法女学園3年生のまじめで面倒見のいい騎士。所属する部活は魔導乗馬倶楽部。

J-cup
Sistine

エレン先生

Teacher Ellen

[CV: 綾野莉音]

身長: 163cm
スリーサイズ: B113/W58/H98

勇者レベルに魔法の腕があるユリドラシル魔法女学園の女教師。母性溢れる人柄だがショタ。



サラ

Sarah

[CV: 波野夏花]

身長: 162cm
スリーサイズ: B102/W59/H95

ユリドラシル魔法女学園内にあるギルドの頼りになる女店主。兼業で購買部も営んでいる。



N-cup
Teacher Ellen

M-cup
Sarah

ヒロインじゃなくてもHシーンが楽しめる!

Characters

ジルダ

Gilda

[CV: 風鈴みずす]

身長: 156cm
スリーサイズ: B97/W54/H84

炎 厨矢がクエスト中に出会った天真爛漫な女盗賊。ムチの使い手でムチムチおっぱいの持ち主。



I-cup
Gilda

アサミ

Asami

[CV: 風鈴みずす]

身長: 158cm
スリーサイズ: B93/W58/H88

忍ノ里学園1年生のくノ一で、まじめな融通の効かない性格。おっぱいととも感じやすい。



I-cup
Asami

ティアナ

Tiana

[CV: こなみ由梨]

身長: 155cm
スリーサイズ: B98/W55/H92

おしとやかで気遣いのできる人魚姫。ユリドラシル魔法女学園1年生ながら、婚約者がいる。



L-cup
Tiana

「ああ……あつたかい、先輩のザーメン……匂いも濃くて……
べろっ、やっぱりこの味……癖になっちゃいそうです……」



ルミア「子宮も顔も、身体も……先輩のザーメンでいっぱい
で……本当に先輩色に染められちゃいました……んっ、ああ
……まだ子宮の中でたぶたぶしてます……」

身体の中も外も精液まみれにされながら、うっとり甘い息
を漏らすルミアちゃん。

炎厨矢「そんなに嬉しそうにしてくれるなら、デッサンモデル手
伝った甲斐があったな」

ルミア「あ、あの……先輩、その……私、もっとデッサンが上
手になりたいんです」

ルミアちゃんは恥ずかしそうに頷く。

ルミア「なので……その、もう一回モデルをお願いできません
か……？ はあはあ」

とても本来の目的とは別の欲望が目覚めているのは間違い。



「ああっ……おっぱいのなかで先輩のヘビさん暴れて……
ああっ、いっぱい出してるう……ああっ、んむんんっ！」

ルミア「あっ……せ、先輩……まだ、こんなに……」

炎厨矢「ゴメン、ルミアちゃん。一回出ただけじゃ、チンポの石化は解けないみたいだ」
おっぱいマンコが気持ちよすぎて、まだ満足できない俺のわがままチンポをルミアち
ゃんは嬉しそうに眺める。

ルミア「もう、本当に困ったヘビさんですね……こんなに出しても、まだ石化が解け
ないなんて……いったいどうしたらいいんでしょう？」

炎厨矢「それじゃ、次は舌で解除魔法をかけてくれないかな？」

ルミア「舌で、ですか……？」

炎厨矢「ルミアちゃん？ もしかして、嫌？」

ルミア「そ、そうではなくて……その……こ、こんな舌でも、いいですか……？」

ルミアちゃんがベロツと舌を出す。それはメジャーさらしく、ヘビのような薄くて細く
て、そして長くて先が二つに割れているものだった。





マリイ「ああっ、あつ……こ、こんなに激しく摩擦したら……オマンコ、火傷する……んあああつ!!」

ペニスの熱が移ったのか、オマンコまでどんどん熱を帯びていく。それに比例するように快感が大きくなり、俺はもちろん、マリイ先輩も感じまくる。

マリイ「んんっ、あつ……あん、あんっ……んくう、ああっ、はあああああんっ!!」

さらに膣肉から染み出した愛液とカウパーが混ざり合い、膣内でいやらしい液体がかき混ぜられる。そして腰を引き抜くたびに液体がかき出され、マリイ先輩の太股がぐっしょりと濡らしていく。

炎厨矢「マリイ先輩、だんだん余裕がなくなってきたんじゃないですか?」

マリイ「そ、そんなことは……ああつ、ま、まだまだ……あたしは、あああつ、んんっ……ひゃああんっ!」

炎厨矢「まだ素直になってくれませんか……それじゃあ仕方ないですね。秘密兵器を使いましょう」

マリイ「ひ、秘密兵器って……まさかお前っ……」

俺が軍配を持って振りかぶっているのを見て、どこか嬉々としたいやらしい表情を浮かべるマリイ先輩。

「ちよ、調子に乗るな……こ、この程度であたしを満足させられると……んんっ、思っているの、か……あつ、んむんんっ!」



**(こ、今度は、お尻に……
ああっ、撫でられてる、みたいで……
私はどうなってしまったんですの……あぁあぁっ!)**



セリカ「匠様、いけませんわ……お戯れが過ぎます……こ、こんなこと……はあぁん……」

炎厨矢「大丈夫、すぐにセリカちゃんの方がお戯れがすぎるようになっちゃうからっ」

ちらちらとペニスを見ながら拒むセリカちゃんの膣口に、切っ先だけをゆっくり挿入していく。

炎厨矢「ほら、セリカちゃんの欲しがりマンコ……俺のチンポにすごく甘えてくるんですがっ!」

セリカ「そ、そんな……は、はしたない……それに、こ、こんなところで……」

炎厨矢「そんなこと言って、さっき俺に身体を触られて感じちゃったよね? それにお漏らしまで」

セリカちゃんは心底恥ずかしそうにうつむく。

炎厨矢「恥ずかしなことなんか無いよ。エッチに素直な女の子はすごく魅力的だし……俺はセリカちゃんと一緒に気持ちよくなりたいぜっ!」

セリカちゃんははばらくうつむいて、静かにコクリ、と頷く。腰にぐっと力を入れ、セリカちゃんの膣口に挿入されている切っ先をさらに奥へと突き入れた。



「あぁあぁっ、んんっ……んやあぁあぁっ! 匠様あ、わたくしい……魔導ペニス部に、あぁあぁっ……入部したいですう……んんう、はぁあぁあぁんっ!」

炎厨矢「テニスだけでなくペニスへの締めつけも上手いなっ、この分ならペニス部でもエースになれるぞだなっ」

セリカ「そ、そんな……あまりお褒めにしないでください……恥ずかしいです……んんっ」

炎厨矢「チンポ啜えてるのに、セリカちゃんはお淑やかだな……これは、萌えか……これがギャップ萌えなんだなっ!」

セリカ「あぁあぁんっ、チンポ、ピクってしまいました……あぁあぁっ、恥ずかしい、ですけど……匠様に満足していただければ、嬉しいです……んんっ」

炎厨矢「くそっ、可愛すぎるぜっ、こんにやろっ!」

萌え死にしてしまいそうなくらい、セリカちゃんが可愛すぎてもう我慢できない。俺は最初から激しくペニスを打ち付けていく。



カトレヌ「もう、ほんとに可愛いんだからミルファちゃんは、身体魔導測定でこんなに感じちゃうなんて、淫乱すぎるわよ?」

ミルファ「はあはあ……だ、だって……聴診器が、乳首をいっぱい気持ちよくして……んっ、こんな知らなかったんです……」

可愛らしく身体をヒクヒクさせ、羞恥に震えるミルファちゃんが可愛すぎる。元の身体なら確実に悶絶して、その辺を転げ回っていただろう。

カトレヌ「あら? あらあら……母乳がダダ漏れになってるわよ? そんなに気持ちよかったのね、フフ、可愛すぎるわミルファちゃん」

ミルファ「いやあ……言わないでくださいい……こんなエッチでスケベだなんて……恥ずかしいですよ……」



「ああんう、ごめんなさい……先輩……私、乳首は、すぐ感じちゃうんです……ひゃうっ!」



「あああっ……それ、だめだめ、だめですうっ……あああっ、電気みた感じすぎてっ……あ、イっくううううっ!!」



ミルファ「お、男の人?……えっ……い、いやあっ……ンっ……先輩、先輩っ……ああん」

炎厨矢「もうこんなにミルクもスケベ汁もいっぱい出しちゃって……」

ミルファ「ああん……はあん……そこっ……らめえっ……ンっ」

らめえと言いつつ身体はもう、おマンコを愛撫する舌と唇の虜になっていた。

炎厨矢「女の子のおマンコは赤ちゃんを産むためにあるんだよ……ミルファちゃん。だから女の子同士より男の子の方が一番気持ち良くなるような身体の仕組みになってるんだ……ちゅぷ」

先ほどまで女性の繊細で小さな舌に舐め回されていた感触と違い、まるで力強い獣に舐め回されているような感触を味わうミルファちゃん。カトレヌ先輩がいいのに……でも、力強く抑えこまれ無理矢理マンコに舌を入れられた時に、先ほどとは違った快感が芽生え始めていた。



「っはああああああんっ! きたあ……種付けザーメン、子宮に注がれてるのお! ああっ、んあああああっ!!」



システィーネ「あああっ! オマンコのなかでザーメンも出たり、入ったり……こ、こんなに気持ちいいの、たえられな……んあああああっ!!」
初めての感触と快感に酔いしれる先輩。とてもさっきまで処女だった先輩がこんなにも中出しにハマるなんて、予想外だったぜ。絶頂を終えても膣肉がねっとりとうねってくる先輩のマンコ。

炎厨矢「ああっ……先輩のマンコ、まだすごい締付けて……ヤバイですっ……はあああ」

システィーネ「んんっ……匠クンのオチンポも……すごいわ……こんなに出されたら、絶対に孕んじゃう……ああ……種付けザーメン、温かくて気持ちいいの……」

二人の結合部を眺めながら妖艶な表情を浮かべる先輩。

炎厨矢「先輩……」

システィーネ「ふふっ、ダメ♪ まだ抜かないから……このオチンポはもう私のモノなんだから……ちゅっ」



エレン先生「ああ……こんなに出したのに、まだ出るの? 匠君は本当に甘えん坊さんね……ああっ、気持ちいいっ……んっ、くはあ……」
何度も脈打ちながら暴れるペニスを、まるで母親が我が子を抱きしめるように包み込む膣肉。

炎厨矢「せ、先生……全部受け止めて……」

エレン先生「ふふっ、いいわよ……私の身体で匠君を満足させてあげる。遠慮なく甘えて♪ ああ、イってる顔もカワイイだから……ああんっ!」
教え子に中出しまでされてしまい、羞恥を感じつつもショタに対する欲情のほうが勝っているエレン先生は、慈愛に満ちた膣内で精液を受け止めてくれた。そのおかげで、ほとぼる精液が止まることはなく鈴口から出続けた。



「んはああああああっ!! でてるうっ、匠君の濃くて熱い精液、私のなかで出ちゃってる、んん……っ!」



(な、なんなの……これ……あんっ……お尻、揉まれて……ああっ、んむんっ!)

お尻を揉まれるたび快感が増幅して、だらしなく開いた口から漏れる嬌声も色っぽく、甘ったるくなっていく先輩。

スティーネ (ああっ、んっ……ダ、ダメ……こ、こんなこと……ダメなのに、感じちゃう……ああっ、んっ……んくううっ!!)

オナニー好きの先輩にとって、ここまでの刺激を与えられては我慢できるわけもなく、どんどん淫らな姿になっていく。そんな先輩が可愛らしくて俺はどんどん高ぶって、さらに揉みしだく手に力が入る。

スティーネ 「ああ……んっ、んん……はあ、あん……んんっ……はああんっ」

脳味噌まで蕩けてしまいそうな喘ぎ声、そして止め処なく溢れる汁が台座に広がり、エッチな匂いが魔法を通じて俺に届けられる。

炎厨矢 (んんんっ……ほんと処女の匂いたまはないぜっ)

もっと愛液を感じたいと思うと、勃起するペニスのようにどんどん台座が盛り上がっていく。

スティーネ 「あああんっ……ま、また……アソコ、強く擦れてっ……んっ、あんっ……やあんうっ!」

思惑通り、どんどん溢れ出てくる愛液が台座に広がり染みが出来ていく。





「乳首一緒にペロペロされながら……
せっくしゅ……だいしゅきなっ……
あひゅうらんっ!!」

サラ「いやぁん……ああっ……これ、ダメになっちゃうチンポっ……なのぉ……はぁん、
ああんっ!」

チンポが擦り上げられるたびに、絡みついてくる幾重もの肉壁。絡みついてくる肉壁の搔痒感にも似た快感に、背を電流が走るようにビクッと何度も身体を痙攣させる俺。これが大人の女性のマンコかと感嘆するのをつかの間、サラさんはチンポをむさぼるように吐息とおっぱいと腰を俺にぶつけてきていた。

炎厨矢「ああ、もううっ……やばいっ……サラさんっ」

サラ「ああんっ……匠クンっ……アタシの牝マンコの中に……匠クンのザーメンいっぱい
ちょうだいっ……あふれるくらい注いでっ、ンンあっ」

とサラさんが、耳元でささやいてくる。もう、遠慮なんかしている余裕は無く、サラさんの中で欲望をぶちまけたいがために腰をガンガン突き上げる。

サラ「ああんっ……ンンっ……ああんっ、あっ、あっ、あっ、ああん、んふうっ!」
リップが瑞々しく見えるサラさんの口から惱ましい喘ぎ声が溢れ続ける。

サラ「あああっ、チンポ、チンポっ……チンポいいのぉ! しゅきなだけ、チンポで私の牝マンコ、えぐってくらしゃいっのぉ!」





（ダメ、ダメ………こ、こんなことになってるなんて………生徒さんには見せられないわ………が、我慢しないと………ああああんう）



サラ（あああっ！ カリが入ってすぐの場所、小刻みに引っ掻いて……ああっ、そ、それ……おかしくなりそう……んぐううっ！）

入り口付近を集中的に擦り、膣道が寂しくなったところに一気に奥まで突き上げる。

サラ（ひぐううっ！ 急に奥までずんって……ああっ、んっ、あああっ……こ、こんな緩急、つけられたら……いっぱい感じちゃう……あああっ！）

エスカレートしていく膣への快感に耐えるサラさんのもとへさらなる試練が。これもなにかの因果か、今日に限って客足が絶えない。

サラ（な、なんでこ、こんなときに……ああっ、ダメっ、いま接客中だから……ああっ、ダメだって……んっ、ああああっ！）

接客中だからこそペニスを力強く動かし、サラさんを責めたてていく。時折漏れる喘ぎ声をごまかしながら、なんとか接客をこなすサラさん。

サラ（んんっ、あっ、あっ……んぐううっ！ んっ、あんっ……やあ、んあああっ！）

しかし、ペニスを舐めた状態でいつも通りとはいかず、エッチな言い間違えやしやくりと称した喘ぎ声を連発。女子生徒たちもそれを不思議に思ったのか、心配そうな眼差しを向ける。

サラ（やあん、見ないで……そ、そんなに私を見ないで……チンポ舐えながら接客してるとこ、見られたら……）

炎厨矢「もう出そうだっ、このままアナルに出すぜっ!」

ジルダ「ああんう……ああっ! ほ、本当に出すのっ……? ああっ、やあっ、っはあああん!」

そう言いつつも腰を押し付けてくるジルダ。元から抜くつもりはなかったが、これで迷いはなくなった。腰が痙攣を起こすまで一心不乱に振りまくり、射精感を限界まで高めていく。パイプを乱暴に動かして、アナルと一緒に膣への刺激も大きくしていく。

ジルダ「んんっ、ああ、あんっ! ア、アタシもまたきちゃうっ! ああっ、うああ……んんっ、はああああーっ!!」
今日二度目の射精で、ある程度の空洞があるはずのアナルを満タンにさせるほどの精液を吐き出す。

ジルダ「ああ……お尻にも熱いせーし出で……んんっ、ま、またっ、イクううーっ!!」

腰をビクビクと浮かせ、三度目とは思えないくらい激しい絶頂を迎えるジルダ。



「はあああ……こ、こんなにイカされる……
なんて、も、もうオナニーじゃ満足できなくなっちゃう……」



「はぐう、恐るべき忍術というか妊術……ああん、は、早くう……どける、匠殿っ、はあはあ」



やばいなっ……突き上げるたびに、ヌルヌルしまって男を奥に引き込もうとするイヤらしいノーマンコだな。

アサミ「はひいっ……何コレっ、いやあんっ……ああっ、あっ、あああ、あんっ」

子宮の奥に激しくちゅっちゅされちゃってる感触……アサミちゃんは激しく興奮のさざ波に揺られ背筋が粟立っていた。

炎厨矢「打ち付けるたびに、マンコ汁噴いちゃってるぞ？ ぐー、チンポにギンギンくるぜっ」

アサミ「もうう……らめえ……奥までギュンギュンに響いてきて……今日は安全日だから中に欲しくなっちゃうう」

感じちゃって乳輪から出てる乳首もこんなにプリプリに硬くしてるし。

ティアナ「あああっ……これいじょうだしやれたら……結婚前に、にんしんちやうから……らめれすっ……ああああん」

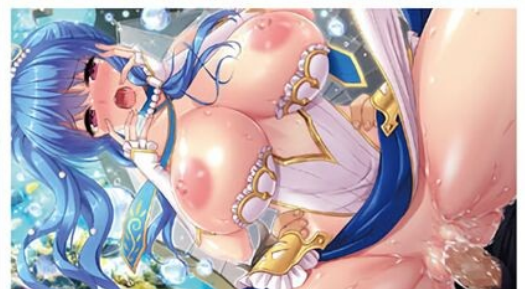
炎厨矢「はあはあ、フフ、じゃあ……途中で止めちゃう？ ティアナちゃん？」

クリトリスと乳首を強くひねりながら迫る俺。こんな牝状態で腰振る女性から出る答えは、ガチガチのオッズで出走する馬を当てるぐらい簡単に答えを予想できた。

ティアナ「あああっ、らめえ……おチンポやめないでくださいい……あああん、おチンポ欲しくて、しえつないですうっ、んんうっ!!」

先ほどよりさらにマンコがキツくなってくる。チンポ大好き物の牝人魚になってしまったティアナちゃんもそろそろ限界に達するようだ。

ティアナ「あっ、あああん……中は中には……だしいいれ……あ あうっ、ああああん!!」



「あああっ! しょれ、すごくらめれすっ……おまんこのおくに……あたってわらし、おかひくなっちゃうの……ああああんっ!」



「はあはあ……
もう、こんなせーし
いっぱい
浴びちゃったら……
欲しくなっちゃやう
……シンっ」(魔美)



舌がスクリューのように回転して亀頭を舐め回すなんて
っ、これはっ……うはああっ!

ナスターシャ「ほんとに……んふうっ……シンふう……こん
なにタマタマも膨らませちゃって……はんふうっ……シン
っ」

炎厨矢「くはああっ!」

袋がハムハム食べられて気持ちイイっ!

ナスターシャ「シンっ……ちゅぶじゅるっ……はんっ、んん
っ……んふうう……はむっ、ちゅぶっ、ちゅる」

マリア「ああ、こんなたくましいもの……一体、わたくした
ち、どうすればいいのかしら……はむうんふう……レロレ
ロ。はむっ……シンふう……シンっ……んふううっ……は
むっ、ちゅぶううっ、シンふう……ちゅるっ」

マリアさんの厚っぼたい柔らかな唇がチンポをしゃぶり
ながら舐め下ろしていく。

ムンムン「あむっ、ちゅぶっ……このオチンポは私のモノ
なの……シンっん……シン、ちゅぶっ。んふうっ……じゅぶ
じゅるる……シンっ……はぶうううっ……じゅぶるる、ん
ふううっ」

ムンムンさんが唾を溜めてまぶしながら、ジュブジュボと卑
猥な音をたててカウパーと4人の母親達の母乳で濡れた
チンポをバキュームしていた。





「もう、そんなにじろじろ
見るなんて、娘に聞いてた通り
本当にスケベえな子なのね、
タクミくんって♪」(ムンムン)

エレクトラ「なかなか立派なものを持っているじゃないか、それじゃさっそく1
セット、お相手願おうか」

俺にお尻を向け、肉ピラを広げて誘ってくるのは褐色肌のエレクトラさん。その
気の強そうな口調や仕草から、元女戦士の面影が見て取れる。思わず尻
に敷かれたい、責められたい、そんな気持ちにさせる雰囲気をもっている。
そんな人の締まったお尻と、すでに濡れているマンコ。そして、早く入れてと言
わんばかりに広げられたアナルを見ているだけで、思わずエレクトしてしま
うのだ。

イザベル「ムンムンが言っていたけど、凄いかしら、この子？」

エルフのなかでも名門と呼ばれる家系だというイザベルさん。その輝くよう
な金髪と気品漂う雰囲気を持っているが、それとは対照的に身体のほうは、
とてつもなくエロい。くびれた腰つきとアウトラインが優美なおっぱい。男を
虜にするフェロモンがあちこちから漂ってくる。そしていまにも溢れ出しそうな
母乳が美味しそうで、すぐにでもしゃぶりつきたくなる。

サブリナ「ふふーん、人間なんだ。もう、彼のラケットこんなになっちゃって
るよ。早く始めようよ」



▲学園外観(大)



▲学園外観(小)



▲廊下



▲教室



▲保健室



▲中庭



▲家庭科室



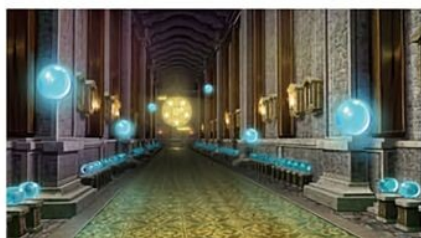
▲ギルド



▲スケートリンク



▲メイド喫茶



▲ダンジョン



▲美術室



▲屋内闘技場



▲女子更衣室



▲女子相撲部



▲茶道室



▲屋内プール



▲乗馬クラブ



▲女子寮風呂



▲主人公の部屋



▲主人公の部屋(夜)



▲異世界ラブホ



▲ナオミンの部屋



▲カシュニアの部屋



▲寮の廊下



▲主人公の自宅風呂



▲竜空艇の上



▲竜空艇食堂



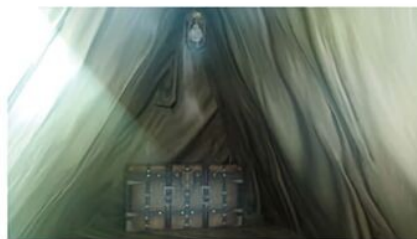
▲竜空艇シャワールーム



▲湯治の里(露天風呂内)



▲教会



▲テントの中



▲テントの中(夜)



▲フィールド



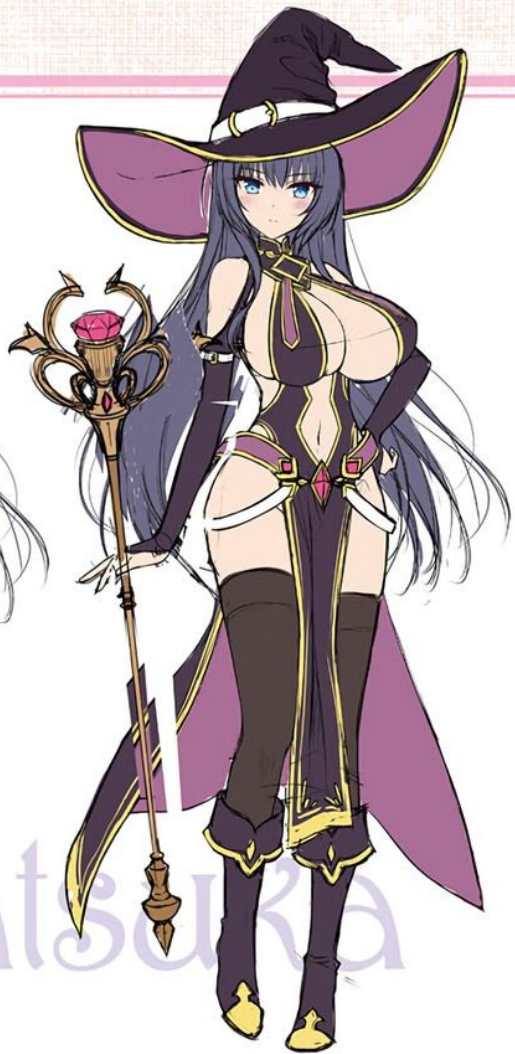
▲フィールド(夜)



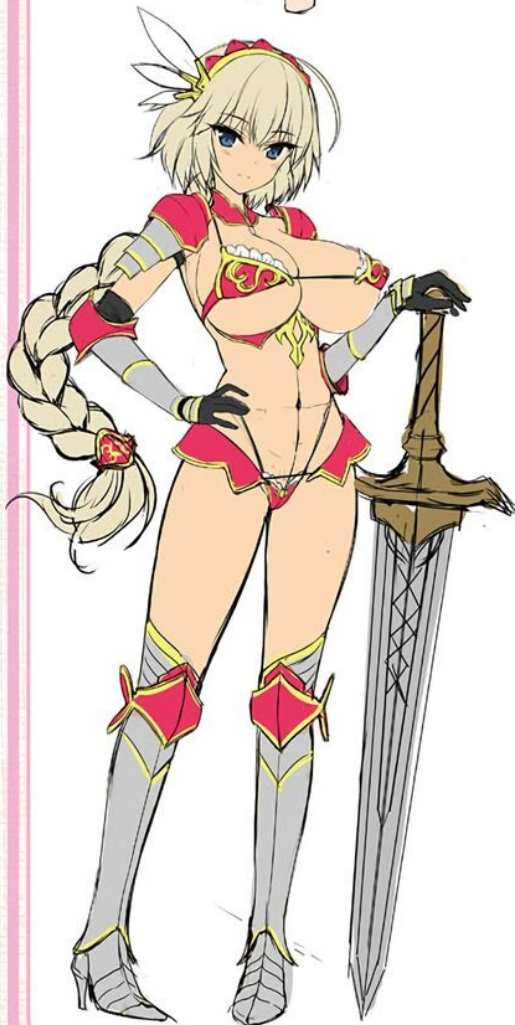
▲プール施設

天使 英玲奈

立ち絵ラブ Rough of Erena Amatsuka



Erena Amatsuka



オルガ Rough of Olga
立ち絵ラブ



Olga

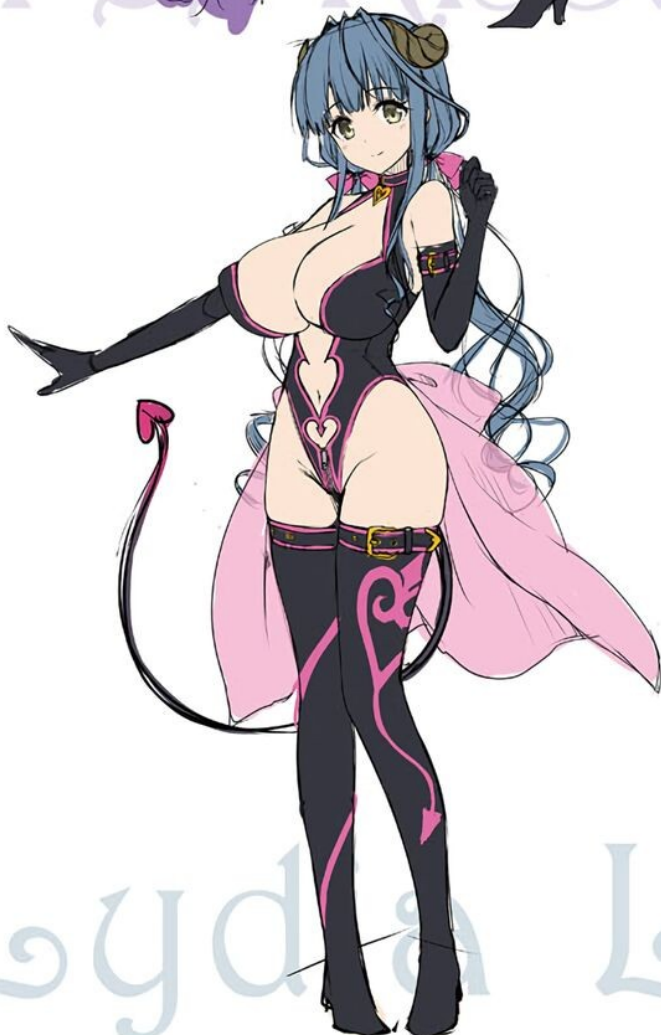
フィー = キステルミット

立ち絵ラフ Rough of Fee Kissthermitz



リディア = ルイトガルト

立ち絵ラフ Rough of Lydia Luitgard



カシュニア = ブラッド = クラウゼル

立ち絵ラブ Rough of Kashnia Blood Claussell



ナオミン = イヴァ = ルシル

立ち絵ラブ Rough of Naomin Iva Lucille



カトレヌ = エ = ロマンシア

立ち絵ラフ Rough of Cathrine E. Romancia



Cathrine E.
Romancia



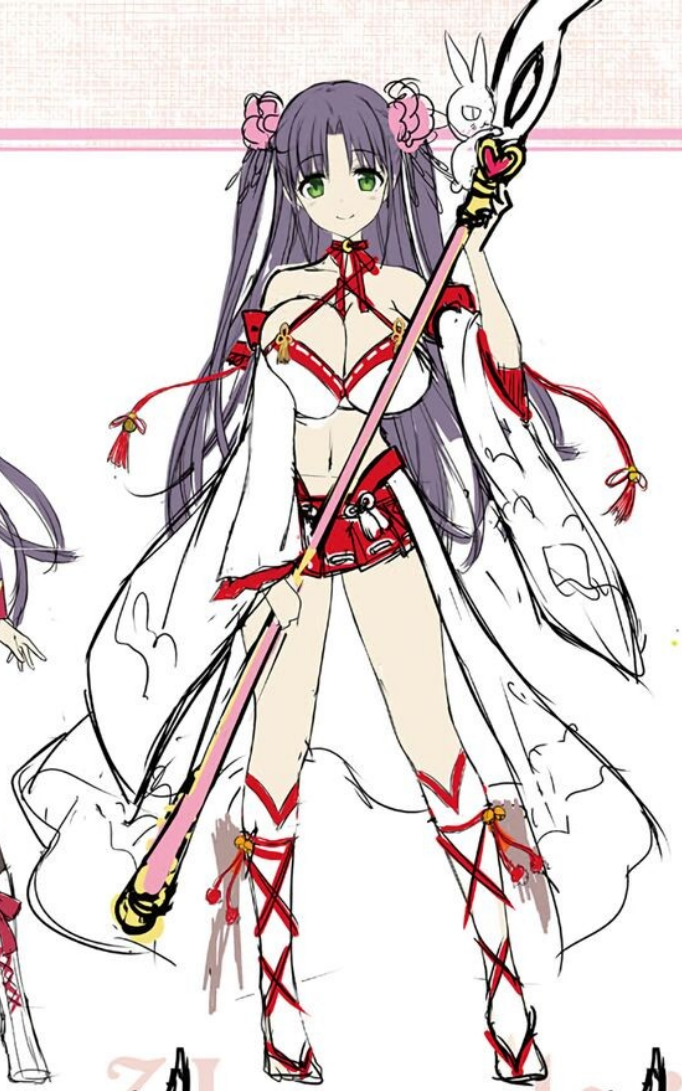
ミャウ = オルフェル

立ち絵ラフ Rough of Myau Orufera

Myau Orufera

兔月姫 かぐや

立ち絵ラフ Rough of Kaguya Uzuk



Kaguya Uzuki





雪乃小路 みぞれ

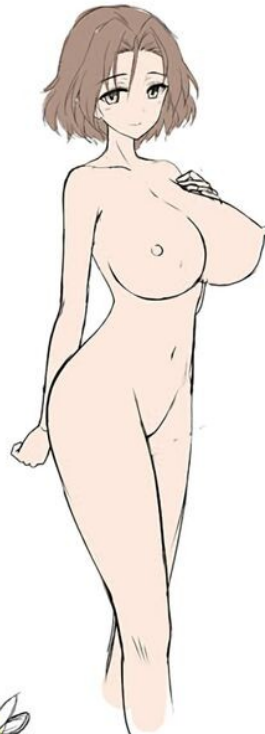
立ち絵ラフ Rough of Mizore Yukiinokouji



サラ

立ち絵ラブ Sarah

Sarah



エレン先生

立ち絵ラブ Teacher Ellen

Teacher Ellen

Marie



セリカ

立ち絵ラブ Celica

Celica

Lumia

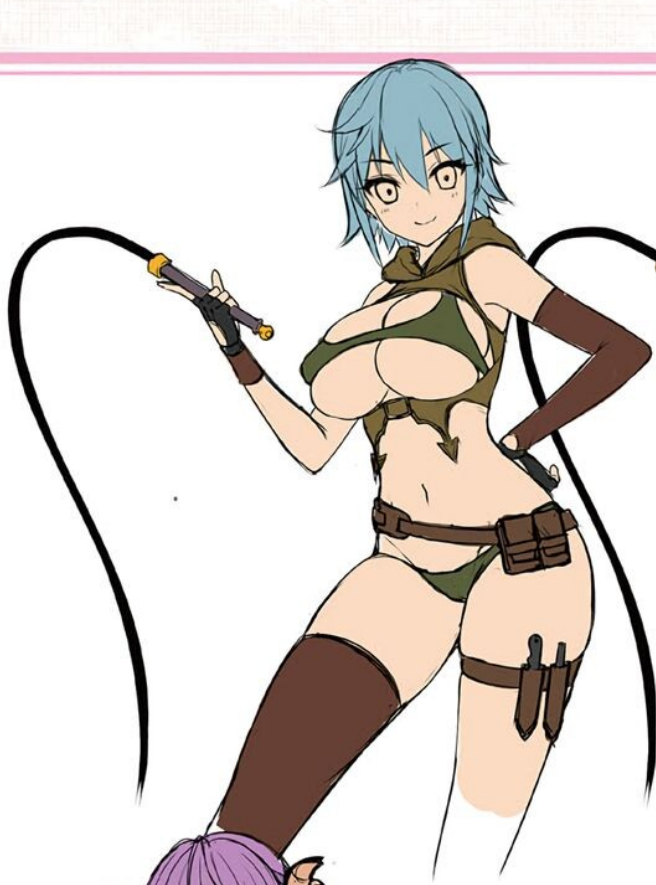


ルミア

立ち絵ラブ Lumia

マリエ

立ち絵ラブ Marie



ジルダ

立ち絵ラフ Gilda

Gilda



Mirufa

ミルファ

立ち絵ラフ Mirufa



Sistine

システィーネ

立ち絵ラフ Sistine



Asami

アサミ

立ち絵ラフ Asami



ティアナ

立ち絵ラフ Tiana

Tiana



The design of the heroine's mother only in the brain.



【英玲奈&魔美】

【親子丼】

母を交えてのプレイは、メインヒロインに必ず用意されているシチュエーション。ユーザーにとっては楽しみしかない禁断の遊び。構図のバリエーションが豊富なのも、嬉しいポイント。



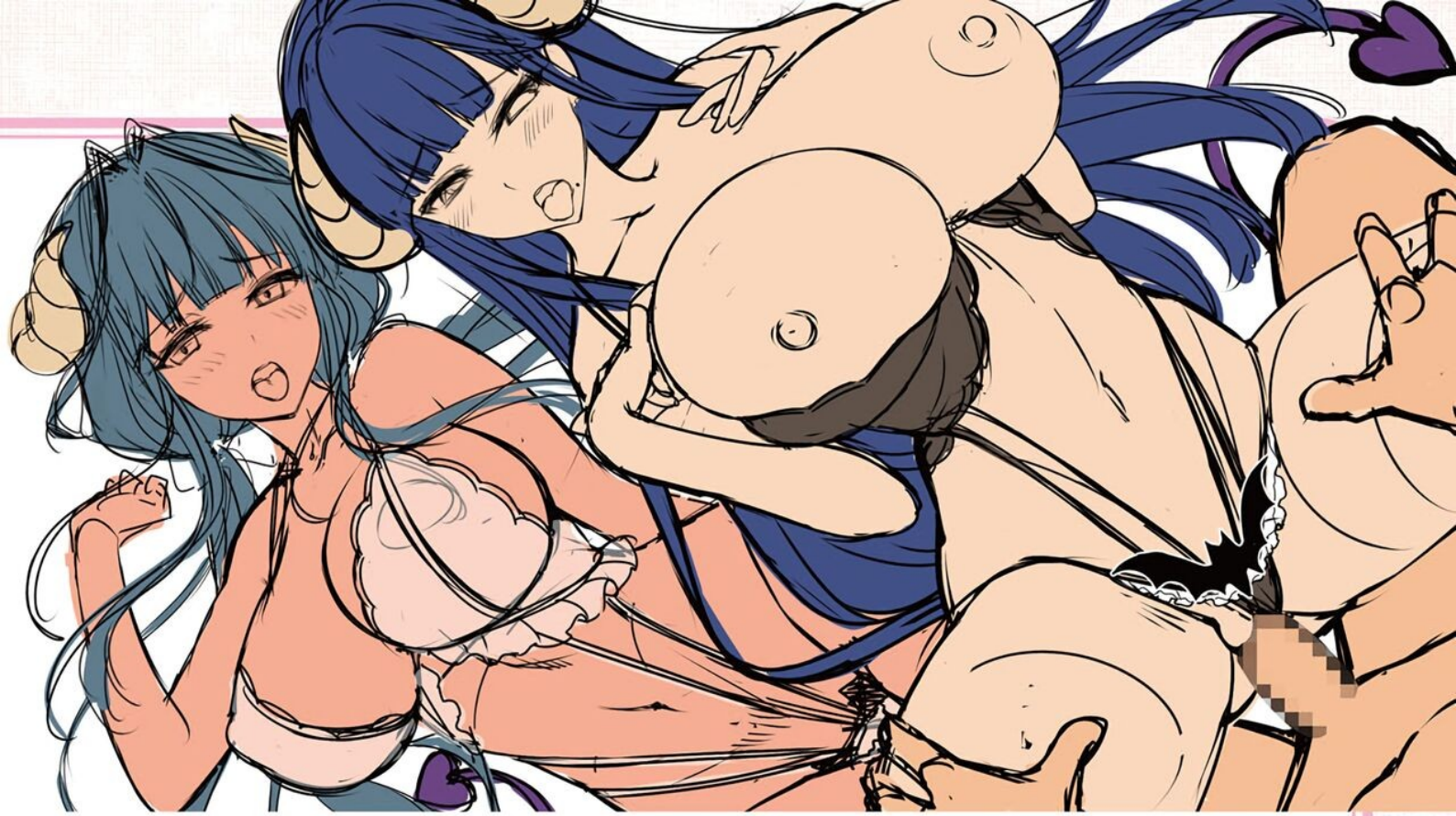
【英玲奈&魔美】



【フィー&ルフィーナ】

【オルガ&マリア】





[リディア&リルダ]

母親のデザインは
原画家の脳内のみ存在！
一発描きの
貴重なラブ画像を大公開！！



[カシュニア&ナスターシャ]



[カトレーヌ&ロレーヌ]



[ナオミン&ムンムン]

The design of the heroine's mother only in the brain.

構図を使い分け、
似たようなシーンも
多彩に演出！

【カトレヌ&ロレーヌ】



【かぐや&美竹】



【ミヤウ&ディーレ】

【みぞれ&深雪】





【母親ハーレム】

ヒロインとその母親を比較して楽しむのも良いが、牝へと変貌した人妻たちが並び迫る眺めは迫力があって壮観。これらも全て一発描きとは凄すぎる！

【エレクトラ&イザベル&ムンムン&サブリーナ】



【ムンムン&魔美&ナスターシャ&マリア】



【没ラブ】

カトリーヌとミルファの絡みシーンの没ラブ。このシーンの決定校は全く違う構図となっているので、良い感じに見えるが、どこかがしっくり来なかったのだろう。

Milk Factory みるくふぁくとりー

[リミテッド・インタビュー]
LIMITED INTERVIEW

～作品を生み出すメインスタッフが語る制作裏話～



みるくふぁくとりー代表

SQUEEZ 時代は「炎の孕ませ」シリーズを陰日向で支えていた。苦労を厭わない縁の下の力持ち。



でらうえあ

「炎の孕ませおっぱい★エロアプリ学園」(SQUEEZ) で原画デビュー。その縁でみるくふぁくとりー設立メンバーとなる。



唐子ニコフ

おっぱいを愛し、おっぱいに愛されたおっぱいディレクター。「炎の孕ませ」シリーズ初期から制作に携わっている



▲ 2016年に発売された、でらうえあ先生のデビュー作「炎の孕ませおっぱい★エロアプリ学園」(SQUEEZ)で、みるくふぁくとりーを創設するメインスタッフが初めて出会った

みるくふぁくとりーは 世界観=唐子ニコフ

——みるくふぁくとりーデビュー作で異世界を舞台に選んだのは何故でしょうか。シリーズ初ですよね。

ディレクター唐子ニコフ(以下、唐子)：ライトノベルやアニメで異世界物が流行っていて、それを取り入れたいと考えて、ですね。

みるくふぁくとりー代表(以下、代表)：彼は流行に凄く敏感なんですよ。

でらうえあ：私は「炎の孕ませおっぱい★エロアプリ学園」(SQUEEZ)からの参加なので、一緒に制作するのは2回目でしたが、それでも最初は少し驚きました。これまで異世界作品をガッツリやってこなかったのを知っていたので。

——そうでしたね。「炎の孕ませ」シリーズでは、普通の学園物が舞台で、転校生とか同級生をヒロインにしましたよね。

代表：実のところ、世界観の決定に関しては雰囲気です。ディレクターの唐子ニコフの発案を軸にして、ディスカッションして決めていく感じですね。異世界であること、などはそこまで重要なポイントではなかったりします。

——唐子さんへの信頼が厚いですね。

唐子：でも確かに世界観などについて指定されることなどはなくて、だから流行っている物で、3人が共感できるものであれば、だいたいGOサインを頂きますね。

代表：そうなんですよ。

——では、次回作がどうい世界観になるか

は、お客さんはもちろんスタッフ皆さん誰も読めないですね。

代表：それに関しては、ジャックインザボックスというか、ビックリ箱みたいな感じでやっています。

——といえますと?

代表：それは「炎の孕ませ」シリーズに携わっていた唐子ニコフが持つ世界観です。

唐子：世界観とまで言えるのは判りませんが、必ず主人公に近い存在がメインヒロインになるようにしています。少なくともみるくふぁくとりーの3作品はそう作ってきてますし、そこは4作目、5作目も同じように制作していくつもりです。

代表：だから必ずメインヒロインは幼なじみなんですよ、3作とも。

唐子：おっぱいの大きな幼なじみキャラが大好きで(笑)。

でらうえあ：そういうところ、ブレないですよ(笑)。

代表：そのおかげで、これも軸のひとつになっていて、世界観を展開するときの中心になっています。でも本当のところ、内部設定では主人公は全員同じキャラなんですよね。

——主人公が同じ?

代表：それは唐子ニコフさんが自分自身を

投影しているから。

唐子：それ以外にも理由はありまして。タイトルに「炎の孕ませ」という文言が毎回付くので、それを考えた場合、ユーザーが想像するのは勢いのある熱い主人公のキャラクター性が真っ先に思い浮かぶと思うんです。ユーザー様からのアンケート結果でも主人公にそのようなキャラクター性を求める声が多いんですよ。それに「炎の孕ませ」と聞いて、優柔不断でなよなよした暗いキャラクターを作ってしまうと、制作する上で日常シーンなどにも影響してしまうんですよ。

メインヒロインだけでなく キャラ数を多くする意図

——ここ数年はヒロインの人数を絞る傾向にあります。が、「もっとな孕ませ!」シリーズではキャラ数を多く登場させてますよね。何かきっかけがあったのでしょうか。

代表：これも、「炎の孕ませ」シリーズに対するリスペクトからですね。

——唐子ニコフさんは、「炎の孕ませ」シリーズの初期の頃から制作に関わっているようですが、そのきっかけについて何か覚えていらっしゃいますか?

唐子：当時はまだ何が売れるかが判らない

「結果を出したことで、これが王道になった。そこからの流れがあって、このコンセプトを継承する形で制作されたのが、「炎の孕ませ」シリーズなんです。」(唐子)

「1キャラ1シーンにしてしまうとキャラに感情移入できない。そこはデメリットだと思っていて、ユーザーに対して訴求力を追求できるようにと考えて試行錯誤した結果が、今のよう形なんですよ。」(代表)

時代で、その頃に制作した多人数を登場させる作品が、凄く売れたんですよ。結果を出したことで、これが王道になった。そこからの流れがあって、このコンセプトを継承する形で制作されたのが、「炎の孕ませ」シリーズなんです。当時は、制作する上で重要視しておいたのが、売れたコンセプトを継承していくこと、でした。多人数であったり。あと目新しいことを取り入れること。これは今もずっとしていることですね。

代表: そういった経緯があったので、我々のチームにはオムニバス形式の作品を開発するベースがありまして。ただ、それだとしても捨いきれない部分もあって、1キャラ1シーンにしてしまうとキャラに感情移入できない。そこはデメリットだと思っていて、ユーザーに対して訴求力を追求できるようにと考えて試行錯誤した結果が、今のよう形なんですよ。

唐子: メインヒロインという柱があって、そこにはある程度のエッチシーンを用意することで、キャラにハマって貰うように作っていて、それとは別にオムニバス形式の本来の魅力を、サブヒロインによって補うようにしています。

——バランスとして、ヒロイン4〜5人にするという考えはなかったのですか？

代表: 業界に入った当初、私はその方が好きだったんですね。もっともっとヒロインのことを知りたいと。でも、そういう作品は世の中にいっぱいあるので、私たちは私たちにできることをやった方がいいんじゃないかと思っただけなんです。幸い、先程申し上げたように、我々にはオムニバス作品を作るノウハウがありましたし、他の作品には無い特徴をもっと特化させた方がいいんじゃないか

など。

——流行の方向に流れなかったのは、他作品との差別化を図った訳ですか。

こだわりはバストサイズとキャラクターデザインと色味

——以前のシリーズではヒロインにもちっぴいキャラが登場していた時期もあったと思うんですが。あるときから巨乳に振り切って制作するようになったのは、何かきっかけがあったんでしょうか。

唐子: どの作品の頃だったかは記憶が定かではないのですが、何かに特化しようという話から、全員何cm以上という新たなコンセプトを付けることになって、おそらくそこからだと思えます。

——評判が良かったんですか。

唐子: はい。この頃から流行っているモノを取り入れるというコンセプトは変わっていないので。後、人気投票みたいなものを毎作品HPでやっていて、おっぱいの大きいキャラが1位にすることが多いんですよ、SQUEEZ作品は。

代表: おっぱいが小さいキャラは要らないんじゃないかという説が、その頃から出るようになって。人気があるキャラの傾向を考えると、おっぱいのボリュームは特化させていいんじゃないかという話にまとまったんです。

——それにしても凄くサイズばかりですよ。たまにはちっぴいを描きたくったりしないですか？

代表: 確かに、いくら好きでも毎日ハンバーグは食べられないですよ。それと同じで描き続けるのは大変だと思いますよ。

でらうえあ: 今のところ飽きを感じたことはないですね。私的には、売れてくれるのが一



▲作品内では、みぞれと1位2位を争う小さいおっぱいヒロインのカシュニア。ただし、100cmのJカップバストの持ち主で、下段に掲載しているリディアに劣らぬ迫力が！みるくふぁくとりーが描く異世界サイズ恐るべし!!

番なので！

代表: エロくて面白いゲーム作って、いっぱい売っていきましょう。

唐子: はい！

——ところで、あの巨乳はどうやって描けるようになったのですか？

でらうえあ: 最低これくらいの大きさといったサイズ感がある程度決まっています。唐子ニコフさんが指示して教えてくれるんですよ。サイズ感などはかなり細かく教えて貰っています。ただ、頭と同じ大きさのおっぱいを描いてください、とか言われるので、最初は驚きました。まるで異世界のおっぱいなので。

——確かに、肉体とのバランス取るのが難しそうです。

でらうえあ: そうですね。ただ唐子ニコフさんは元々絵が描ける方なので、指導して頂くときの“このような感じで”が私には解りやすいんですよ。指示が明確に伝わるので、それが異次元巨乳を描ける要因として一番大きいかもしれません。

——いい関係性が築けているんですね。

代表: 外から見てる私にも、どんなキャラなのか判りやすいですよ。

——デザイン資料がありませんでしたけど、お母さんキャラも指示が出るんですか？

でらうえあ: お母さんたちは立ち絵が無いので、資料などは作ってないですね。だからそこは割と自由にやらせて貰っているところがあります。任されている部分が多いですね。——このヒロインを10歳老けさせて、とかですか？

でらうえあ: さすがにそこまで大雑把ではないですね。もうちょっと具体的に指示を貰いますね。髪形とかキャラクターの性格、あとだいたい共通してる指示は、娘より大きなおっぱいで、とかですね。

——娘たちが元々大きいのに、更に大きくしてくれと。それはすぐに描けてしまうものなんですか。



▲迫力溢れるおっぱいは、確かに頭部と同じくらい……いやそれ以上のボリュームが感じられる

「頭と同じ大きさのおっぱいを描いてください、とか言われるので、最初は驚きました。」(でらうえあ)

「(彩色の) 参考にしたのは、 同人で活躍されてた方々ですね。 彼らは流行に敏感なので。」(代表)

でらうえあ: なんとかやってますね。ただ、どれもそのとき限りになるってあるので、イベントCGのときが初描きになります。

—それができてしまうのは凄いですね。だとすると、母親のキャラクターデザインはでらうえあ先生の頭の中にしかないってことですか。

でらうえあ: そうですね。詳細は頭の中にあるので、その場その場で描いている感じですね。このキャラにはあの声優が合ってる、とイメージすることってあるじゃないですか。キャラを見て声を想像できるみたいな感覚じゃないかと思えますね。

—そのグラフィック版が、キャラを見て親族が描ける能力!? いやいや難易度がかなり違うと思いますけど。ところで、作品を通してこだわった部分はどこでしょうか?

でらうえあ: 指示は都度ありました。描き終わっては見直し。キャラクターデザインはかなり念入りに修正しました。塗ってからでも修正したりもしましたから。

—色味が「炎の孕ませ」シリーズと違うのも、その辺が理由なのでしょう。

でらうえあ: 彩色に関しては今までとは違っ

た雰囲気を持たせたかったんで、元同僚でグラフィックができる方に依頼しています。かなり一新して、よりよく見えるように注力しました。

—環境が変わったことで、色味の刷新をしたかったと。

でらうえあ: そういった思いもあったので、品質もそうですが今までとは違った流行の彩色にしたかったんですね。

代表: 参考にしたのは、同人で活躍されてた方々ですね。彼らは流行に敏感なので。いいなと思った彩色や色味を、依頼するグラフィックの方に伝えて、試行錯誤しながらやって頂きました。

でらうえあ: みるくふあくとりーになって、1番の変化は色味なんじゃないかと思えます。

—液体の表現とかではなくて、ですか。

代表: 唐子ニコフさんの嗜好なので、汁の出し方は変わらずですね。むしろ増量しています。

唐子: 私がこだわっていたのは、主人公が無目的になってしまわないように、「異世界

の女の子を全員孕ませる」というコンセプトを大事にしました。これは「炎の孕ませ」シリーズのときから「クラス全員を孕ませる」という野望を主人公に持たせていたので、舞台が異世界になっても、ここがブレないようにしておけば、シリーズの色を保つことができると思ったからです。

独立して解禁となった 様々なメディア展開

—HPでヒロインを紹介するにあたり、ゲーム内には登場しない幼い頃のおっぱいの変遷とかも公表してて、こだわりが凄いです。みるくふあくとりーとなって、意図してやっていることはどんなことでしょうか。

唐子: 「炎の孕ませ」シリーズの制作では、とにかくコストカットが優先されていたので、あのとき出来なかったことを今している感じですね。それを含めて、今やってることは全て血肉になっていて、無駄なことは何も無い。全てが繋がっていると感じています。

でらうえあ: 開発者として楽しいのは、発売日にやっているイベントですね。以前は出来なかったことなので。ゲームを購入してくれたユーザーさんが来てくれて、クジなどの抽選で、そこでしか入手できないグッズを持って帰って貰うのは凄いいいですね。私はい

「開発者として楽しいのは、発売日にやっているイベントですね。以前は出来なかったことなので。」(でらうえあ)

▼アートワークスの表紙を飾ってくれたのは、バレンタイン企画で行ったキャラクター人気投票で2位と3位だったふたり。このページに掲載されてるイラストは、表紙と少し違いがあるの、判るかな?





▲ CG内の登場キャラがすべてデザイン無しでも、ここまで描けるから凄い!

つも現場に行ってサイン会をさせて貰っていて、その様子を見ているだけでもテンションが上がりますし、楽しいです。やっぱり、ユーザーとコミュニケーションを図れるのは良いなど、大切なことだと思ってますね。

—Twitteとかのメディアを上手く活用されてますよね。

でらうえあ: ソーシャルの使い方は意識しています。それは以前と違っているところですね。まずはTwitterでみるくふあくとりーという存在を知って貰うところがスタートで。最初からキャンペーンを打ち出してフォロワーを増やしていこうという感じでした。

—そこが印象的だった。

でらうえあ: 全く知られていないところからスタートしないといけなかったから。

—みるくふあくとりーが「炎の孕ませ」シリーズの魂を受け継ぎましたよ。というのは伝わってなかった?

代表: 伝わって無かったと思います。

でらうえあ: 伝わって無いですよね。一応、HPに「もっと!孕ませ!炎のおっぱい異世界エロ魔法学園!」は「炎の孕ませ」シリーズの元スタッフが制作していますよ。というページは作成したんですが、全然だったと思いますね。未だに知らなかったよ、という人がいますから。

—未だにですか。

代表: 当時、我々が独立したということを公表していいですか、という確認を取りまして、個々人の経歴の否定や差し止めは出来ないから、公表して大丈夫ですよ、と言われたので、許諾を得て報告ページを出したんです

が、手応えは無く……。

—手応えなかったんですか? では「孕ませ」シリーズが受け継がれていることはユーザーに伝わってないのですか? 今でも?

でらうえあ: まだやってたんだ? くらいの反応もあるくらいです。

—ひえええー!

代表: そもそも、「炎の孕ませ」シリーズの情報が風化しつつある感じがあるので、魂を継承しているブランドとしてより、新しいブランドとして認知されているのではないかと思います。

—今はそういう状況になっているのですか、全然知りませんでした。ところで、Twitter以外にもメディアは活用されたりしないのですか? ファンティアのようなサイトとか。

代表: 人手不足で、色々やりたけれど出来てないですね。

唐子: ただ、ありがたいことにホームページの製作に関しては、今は他の方にお任せすることができています。現在はホームページのプロット、デザインのみを今までどおり私が担っています。

代表: それで、唐子ニコフの仕事量が少しでも軽減できて良かったです。でも、その他の業務については難しいですね。もう諦めぎみですが、実はやりたいことはいっぱいあるんですよ。

—例えば、どんなことでしょうか。

代表: 企業としてコミケに出てみたいですね。利益とか度外視してとにかく配布をしたい。これは我々を知って貰うための手段で、手に取って頂いてまずは知って貰わないと、

商品が売れることはないと思っています。

世界観を継承するだけなら 続編の可能性も!?

—今後の展開として、『もっと!孕ませ!炎のおっぱい異世界エロ魔法学園!』続編の制作はあり得ますか?

代表: 要望があれば……。期待値が高ければ制作すると思いますが、ユーザーは続編よりも新しいキャラを見たいんじゃないかなと思っています。だから、制作するなら続編じゃなくて新作を作っちゃうかな、と思います。

唐子: それに続編となると、少し焼き増し感がありますよね。


代表: 前作から続けて登場した唯一のヒロインは田中美佐だけで、それ以外のキャラは新規だった『同級生2』(elf)のような感じであれば、『もっと!孕ませ!炎のおっぱい異世界エロ魔法学園!2』は出していきたいと思います。ただ『もっと!孕ませ!炎のおっぱい異世界エロ魔法学園!』の登場人物が何人も登場する続編は無いですね。

—世界観だけ受け継いでキャラを一新するくらいでないと、ありえないと。

代表: ユーザーがそれを求めている、とかで無い限りはやりません。逆に求めてないだろうな、と思っています。だって別のキャラを出した方が絶対がいいもの。

—なるほど、それについては次の『もっと!孕ませ!炎のおっぱい超エロアプリア学園!アートワークス』の記事で、詳しく聞かせてください。今日はお忙しいなかお時間を頂き、ありがとうございました。

「「炎の孕ませ」シリーズの制作では、とにかくコストカットが優先されていたので、あのとき出来なかったことを今している」(唐子)



もっと! 孕ませ! 炎のおっばい異世界エロ魔法学園!
アートワークス

2022年8月12日 初版第1刷発行

発行人	中沢慎一
編集	メガストア編集部
監修・協力	みるくふぁくとりー
装丁・デザイン	株式会社 Sorairo
発行所	株式会社 コアマガジン
	【営業】
	〒171-8553 東京都豊島区高田 3-7-11
	電話 03 (5950) 5100
	【編集】
	〒171-0033 東京都豊島区高田 3-7-11 4F
	電話 03 (5952) 7812

製版	株式会社山栄プロセス
印刷	大日本印刷株式会社

ISBN 978-4-86653-617-0

©みるくふぁくとりー All Rights Reserved.

乱丁・落丁本は送料弊社負担にてお取り替えいたします。ただし中古でお求めいただいたものはお取り替えいたしかねますので、購入された書店を明記の上弊社営業部までお送りください。

本書の一部または全部を、無断で複製複写（コピー・スキャン・デジタル化等）すること、または本書の複製物の一部または全部を無断で譲渡し、もしくは配信することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼して複製複写（コピー・スキャン・デジタル化等）することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反となります。